

# 地域自立支援事業 実施報告

取組期間:2016年6月21日～2017年2月28日

# 目次

|                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| 1. 特定非営利活動法人都市デザインワークス                | 3  |
| 2. 特定非営利活動法人アイ・キャン                    | 5  |
| 3. 一般社団法人Bridge for Fukushima         | 7  |
| 4. あぶくま農と暮らし塾                         | 9  |
| 5. 田村地域デザインセンター[UDCT]                 | 11 |
| 6. 任意団体 南三陸ローカルリソースラボ                 | 13 |
| 7. 特定非営利活動法人wiz                       | 15 |
| 8. 一般社団法人 東松島みらいとし機構                  | 17 |
| 9. 特定非営利活動法人SET                       | 19 |
| 10. 石巻に恋しちゃった実行委員会                    | 21 |
| 11. 特定非営利活動法人福島県レクリエーション協会            | 23 |
| 12. NPO ぐるぐる応援団                       | 25 |
| 13. ふるさと豊間復興協議会:豊間区(地縁団体法人):豊間協働加工販売会 | 27 |
| 14. 一般社団法人日本カーシェアリング協会                | 29 |
| 15. 特定非営利活動法人にじいろクレヨン                 | 31 |
| 16. 陸前高田市広田町生活体験推進協議会                 | 33 |
| 17. 有限責任事業組合地域創生ビジョン研究所               | 35 |
| 18. 東北被災地語り部フォーラム2017 実行委員会           | 37 |
| 19. 湊北地区合同まちづくり協議会                    | 39 |
| 20. 特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター      | 41 |
| 21. 東北花き園芸復興協議会                       | 43 |
| 22. 支倉小学校再生コンソーシアム                    | 45 |

# 「イグネスクール」スタートアップ事業

(宮城県仙台市) ～特定非営利活動法人都市デザインワークス～

## 対象とする地域課題

地域の環境資源である「居久根」(屋敷林)を現代の暮らしに沿った形での再生

## 今年度の取組

**目的と概要** 居久根(イグネ)は仙台平野における屋敷林の呼び名で、津波により壊滅的被害を受けた。震災から5年経過し、対象地区では生活・住宅の再建が概ねひと段落してきており居久根や地区の環境づくりに取り組む段階にある。「イグネスクール」は、平成25年度から取り組んでいる仙台平野「みんなの居久根」プロジェクトの一環である。今後、更に自主的・主体的に居久根づくりに関わる地域住民や支援者を育てるために、造園専門家等から植え方や育てるコツをより深く学ぶ場として開催するとともに、得たノウハウや記録をハンドブックにまとめ頒布する。

## 内容

### (1)居久根の学校「イグネスクール」の実施

#### ①実践ワークショップの開催

◆植え育てる活動を後押しするために、造園・植栽に関する専門家を招いて、適する樹種や手入れの方法、コツなどを実践を交えたレクチャーの機会となるワークショップを開催する。

#### ②居久根体験・交流会の開催

◆実践ワークショップ参加者向けに現在も居久根を受け継いでいる暮らしの様子を体験し、居久根所有者から手入れの方法などを聞き取れるような交流の機会をもつ。

### (2)居久根(屋敷林)や緑を活かす取組の先進地での研修・交流会

#### ①先進地(景観あずみの、小布施町オープンガーデン)を訪問

- ◆各取組の実施主体関係者からヒアリングや交流、事例収集を行う。
- ◆事務局職員の他、沿岸部町内会(構成団体)で実際に植え育てる取組のキーパーソンとなる住民も同行し「実践者との直接的な体験・交流、対話」を実施する。

### (3)「みんなの居久根Hand Book」の作成

◆今年度の取組や、植え育て方など居久根づくりのノウハウを、手引き集としてまとめる。



震災前(平成13年)の居久根  
(写真提供:高橋親夫)



スクール三回目で実施した  
植樹会の様子

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【居久根の学校「イグネススクール」の実施】

イグネススクールは予定通り3回開催し、延べ約80名が参加した。授業テーマに「植物や樹木の基本的な構造」や「育てるためのコツ」など、実践に則したものにプラス植物科学的な側面も追加した。また、参加者が講師と一緒に実際に現地を歩いて、緑を植え育てる上での困りごとなどを相談できる時間も設けるなど、プログラムに工夫を加えた。

参加者からは「面白かった」「楽しく学べた」という声をいただいている。

植樹・育樹等の実践活動も、集会所の敷地の手入れや南蒲生・新浜各地区の民地(計3カ所)にて、講師の指導により行った。

また、大崎市古川の居久根の見学会も予定通り開催した。



スクールの開催の様子(集会所での座学)



スクール時の実践活動、屋外での授業

### 取組2 【居久根(屋敷林)や緑を活かす取組の先進地での研修・交流会】

長野県の小布施・安曇野を訪れ、現地の取組にかかわる方々と研修・交流を行った。

小布施ではオープンガーデンの取組を行う行政と庭所有者の中から2宅地に訪れ、取組の意義や思いなどを伺った。

安曇野では、屋敷林の保全やPR活動を行う市民団体「景観あづみの」を訪ね、活動状況の聞き取りや課題の共有などを行った上で、現地の屋敷林を案内いただいた。双方とも、仙台沿岸部のまちづくりについて情報を提供し、緑づくり、緑を活用したコミュニティづくりの重要性や課題を確認した。



小布施・安曇野での研修交流会

### 取組3 【みんなの居久根HandBookの制作と成果発表会の開催】

スクールで学んだ緑を植え育てる知識やコツを編んだハンドブックを制作。約30名が参加した成果発表会で配布し、授業の振り返りや成果の報告を行った。

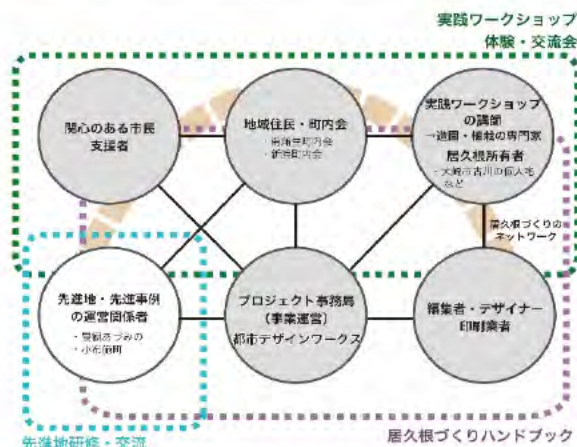
みんなの居久根HandBook▶



成果発表会の様子

## 実施体制図

仙台沿岸部の地元住民・町内会を構成団体とする。



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:**スケジュールに関しては、スクール1、2回目の開催がそれぞれ9月と10月にずれ込んだが、3回目を予定通り11月6日に開催した。目標の達成に関しては、スクール参加者の中には、自宅での緑づくり実践に活かしている例も見られたり、徐々にではあるが意欲が高まってきているように見受けられる。

**今後の展望:**南蒲生、新浜の主体的に取り組んでいる住民と協力して、更なる参加者を得ると共に、他地区からの参加も得たい。また、スクールの講師も増やして、ハンドブックをツールとして、仙台の東部沿岸地域での意欲向上や自立的な活動への発展を目指したい。

# 「超高齢化社会」に向けた共に生きる新たな地域づくり

(福島県本宮市他) ～特定非営利活動法人アイ・キャン～

## 対象とする地域課題

介護専門職人材育成／地域コミュニティ(高齢者の居場所・生きがい・地域との交流の場)の創設／認知症理解啓発活動

## 今年度の取組

**目的と概要** 震災以前より核家族や単身高齢者の割合は増加の一途を辿り、社会や地域、多世代間の繋がりが希薄となっている。震災後、多様な交流が創設されたが、目前に迫る超高齢化社会における地域課題において解決策が見出せていない。今回、介護専門職を志す若者の人材育成への寄与、地域コミュニティ創設、認知症理解啓発活動に積極的に取り組み、多世代が互いの命に寄り添い理解を深められる機会を提供することで、超高齢化社会に向けた共に生きる新しい社会づくりについて地域住民が自ら考え行動が出来る環境づくりへの寄与を目指す。

## 内容

### (1) 介護専門職人材育成への寄与

- ① 高齢者(認知症)に関する理解を深めるための認知症サポーター養成講座を開催
- ② 多世代との繋がりの機会を提供するために動物を介したふれあい活動や介護職の職業体験を実施
  - ◆ 高齢者に寄り添いながら、理解を深めていく機会を提供する。

### (2) 地域コミュニティ(高齢者の居場所、生きがい、地域との交流の場)創設

- ① 社会資源を活かした新・認知症カフェ”カフェ・けあふあーむ”創設
  - ◆ 子どもとの交流、農作業や調理活動を行う機会を提供し、繋がりや居場所を感じる機会を提供する。
- ② 心理士による支援者へのセルフケアやサロン、高齢者や支援者同士の交流の会開催
  - ◆ 同じ悩みを抱える者同士が寄り添い、理解を深め、心の面から支え合える繋がり作りを目指す。

### (3) 認知症理解啓発活動

- ① 福祉の先進国とされるスウェーデンと日本で活躍するグスタフ・ストランデル氏による講演会の開催
- ② 認知症に関する地域課題への有識者によるシンポジウム
  - ◆ 地域住民から参加者募集を募り、地域で認知症と共に生きることについて考える機会を提供する。
  - ◆ 認知症に関する知識を持つことで、互いに支え合える地域づくりを目指す。



# 個別の取組の詳細

取組み件数14件(回) 総参加者数533名

## 取組1

### (1)介護専門職人材育成への寄与

- ①高齢者(認知症)に関する理解を深めるための  
認知症サポーター養成講座を開催  
H28.11.16(水) 高校生14名、教員 6名 計20名参加  
H28.11.18(金) 小学生34名、教員 3名 計37名参加

効果:認知症に関する基礎知識を得て、身近に  
感じることで、助け合い・支え合い・思い  
やりの心を育む機会となった。また、小学  
生による高齢者とのふれあいでは、子供  
から活力を受け取る高齢者の笑顔や嬉し  
み、高齢者から優しく温かい言葉や心を受け  
取る子ども達の嬉しきも恥じな姿があり、  
会場全体が大きな幸せに包まれた。



養成講座を受講し、繋がり証であるオレンジリングを取得

高齢者とのふれあい

- ②介護職の職業体験やボランティアによる  
多世代との繋がり機会を提供  
H28.10.22(土)  
Ⅰアニマルセラピー講習会、実習12名参加  
H28.12.17(土)  
Ⅱボランティア 小学生 1名参加  
H29. 1.14(土)  
Ⅲ職業体験 小学生 2名参加

効果:高齢者の穏やかな笑顔や温かい言葉に触れ、  
専門家より仕事のやり甲斐を聞き、介護の仕  
事を体験して、「思いやりの心」の大切さや仕  
事の魅力を感じ取ることが出来た。また、  
仕事の一つ一つがご利用者様に健康に過  
して頂くために必要なことであるとの話があり、  
他者を思いやり丁寧な仕事を行うことが出来  
た。



高齢者と手を握り、コミュニケーションを図る参加者

ご利用者様を想い丁寧に仕上げる

## 取組2

### (2)地域コミュニティ(高齢者の居場所、生きがい、地域との交流の場)創設

- ①社会資源を活かした新・認知症カフェ「カフェ・けあふあーむ」創設  
H28. 8.22(月) 子どもと菓子作り、昔話  
保育園児24名、教員2名、地域住民20名 計46名参加  
H28. 9.20(火) 農作業と菓子作り 地域住民14名、菓子職人2名 計16名参加  
H28.10.24(月) 農作業と芋煮会 地域住民25名参加  
H28.11. 1(火) 子どもと菓子作り、昔話  
幼稚園児23名、教員2名、地域住民13名 計38名参加  
H28.11.17(木) 健康体操教室 地域住民13名、作業療法士2名 計15名参加  
H28.12.13(火) 低栄養予防セミナー＆高齢者食料教室  
地域住民15名、管理栄養士1名 計16名参加

効果:文化活動による多世代間の交流を図ることで、子どもには素直で優しい心が育ま  
れ、高齢者には活力がみなぎる機会となった。作業療法士より柔軟体操や転倒  
予防が期待される運動がレクチャーされ、管理栄養士から高齢者が陥る低栄養  
についての予防法や簡単で美味しい料理を学ぶ機会を提供することで、健康寿  
命を延ばすための秘訣を身につける機会となった。新たな居場所が創設され地  
域住民同士の繋がりが増えた。

多世代交流(左下)、菓子作り(中上)、芋煮会(右上)で地域住民同士の交流を図った



健康体操(中下)、低栄養予防セミナー＆料理教室(右下)で健康寿命を延ばすことを目指す

- ②心理士による支援者へのセルフケアやサロン、高齢者や支援者同士の交流の会開催  
H28.11.29(火) ほっとひとときサロン 地域住民6名、精神保健福祉士1名、看護士1名、臨床心理士3名 計11名参加  
H29. 1.24(火) ほっとひとときサロン 地域住民2名、社会福祉士1名、看護士1名、臨床心理士3名 計7名参加

効果:自らの体験談などを話すことで心が軽くなった方や、その話から自分の現状と比較し悩みが軽くなった方、またストレスの解消法  
を見つけることが出来た方など、それぞれが「ほっと一息」つづくことの出来る機会となった。サロン後、参加者の表情にも明るさや  
柔らかさに好変化が見られた。気軽に集まり悩みや困りごとを吐き出し共有できるコミュニティが必要であることが認識できた。



心理士によるサロン 体験談を語る参加者

## 取組3

### (3)【認知症理解啓発活動】

- H28.11.22(火) 地域住民257名、シンポジスト6名、スタッフ18名 計287名参加  
①福祉の先進国とされるスウェーデンと日本で活躍する  
グスタフ・ストランデル氏による講演会の開催  
②認知症に関する地域課題への有識者によるシンポジウム

効果:日本に認知症の方がそちら安心して地域の中で暮らすための支援体制が多様  
にありケアの質の充実が図られているが、現在情報弱者には届きにくいことが課題である  
ことを共有した。自分らしく生きる社会や地域づくりが求められていることを認識した。



## 実施体制図

- <代表団体> 特定非営利活動法人アイ・キャン  
・事務局(各団体の調整や企画の実施管理、  
外注依頼、アンケート集計、事業報告、  
今回事業総括)  
・企画立案、実施、参加者募集  
・各種プログラムへの人員援助・事業広報  
・活動場所の提供(バール・イルチェントロ)  
・認知症を考える会(講演会)共催など

- <構成団体名②> 社会福祉法人安積福祉会  
・企画立案、実施、広報、参加者募集  
・活動場所の提供(しらさわ有楽園)  
・各プログラムへの人材援助  
・施設ご利用者へのプログラム参加調整  
・認知症を考える会(講演会)共催など

- <構成団体名③> 社会福祉法人安積愛育園  
・各種プログラムへの人材援助、参加者募集  
・認知症を考える会(講演会)共催など

- <構成団体名④> 有限会社サササービスセンター  
・企画立案、実施、参加者募集  
・各種プログラムへの人材援助  
・ほっとひとときサロン臨床心理士の派遣  
・活動場所の提供(カフェ・チルコロ)  
・機器リース、チラシデザインや印刷など

- <構成団体名①> 医療法人安積愛護園  
・企画立案、実施、参加者募集  
・認知症を考える会(講演会)主催  
(認知症理解啓発活動)  
・事業広報  
・各プログラムへの人材援助など  
・活動場所の提供(フィットネスルーム)

## 事業の成果・今後の展望

事業の成果:(1)では認知症理解を深めることで思いやりの心が育まれ、認知症の方へどのような支援が出来るかを考える  
機会となった。また、介護専門職に魅力を感じる機会を提供出来た。(2)では地域住民同士や多世代間の交流、健康体操  
や低栄養予防セミナー、料理教室の場を提供し、活力ある高齢者の居場所や生きがい作り創設を成し遂げた。参加者から  
継続を望む声を多く頂いた。また、高齢者を見守る支援者向けのサロンでは、支援者の心の健康を保つためのセミナーや  
高齢者福祉支援機関の情報提供、悩みや困りごとを吐き出す場の提供、互いの介護体験談を共有することで「心のわだか  
まり」が解消されるなど、「ほっと一息」について安らげる機会となった。(3)では福祉先進国であるスウェーデンと日本の現状  
を比較し、認知症緩和ケアについて考え、「認知症を含めた一人一人が自分らしく生きていくための社会や地域づくりをどう  
行うべきか」を地域住民が共有できる機会となり、参加者が様々な視点から高齢者(認知症)と向き合い、理解を深められる  
機会となった。参加者満足度アンケートでは293件中、大変良い又は良いが270件(92.2%)と高い評価を得た。本事業により  
高齢者自身に新たな繋がりや居場所、生きがい創設することで、我々が目指す「超高齢化社会に向けた共に生きる新し  
い社会づくり」において地域住民が自ら考え行動が出来る環境づくりへ向けた第一歩を踏み出すことが出来た。

今後の展開:高齢者(認知症)に関する理解は今後も必要である。共に生きる社会づくりへの寄与を目的に、地域住民に向  
けた介護専門職人材育成への寄与を継続実施する。また地域住民と強固になった繋がりやコミュニティを活かし、更なる地  
域課題解決に向けて、こども食堂や不登校、ひきこもりの子どもの見守り活動を実施し、活力ある地域づくりを目指して  
行く。それには地域住民、企業、行政が一体となって課題解決に向け取り組んでいくことが必要であると思料。

# 高校生による地域課題解決プログラム能力強化事業

(福島県全域) ～一般社団法人Bridge for Fukushima～

## 対象とする地域課題

震災以降福島県内で浮き彫りになってきた地域課題に関心を持ち「事業」を計画・実施する高校生が増加する中、事業がより質が高く・効果的に事業が運営できるよう支援する体制の整備

## 今年度の取組

**目的と概要** 当団体では、高校生が地域課題解決に取り組むプロジェクト型学習(PBL)事業を4年間実施してきた。本事業では、ハイスクールピッチやその他の関連活動を通じ、昨年度に明らかとなった課題である、①広報、②事業の担い手の育成、③高校生の事業運営、に重点を置きその能力の強化を目的とした研修を実施し、「福島型高校生人材育成事業」をより確立していくものである。また、ピッチは日本でも数都市で開催されたものの、高校生を対象としたものは独自のものであり、県内及び県外への普及を念頭にその準備を進める。

## 内容

### (1) 広報力強化事業

① 広報におけるワークショップ開催

② 広報冊子の作成

◆ 地域の方たちにより高校生の活動を理解してもらうとともに、継続的な支援者を増やす。

### (2) 事業の担い手の育成

① 傾聴スキル研修

② ファシリテーション研修

③ SROI研修

◆ 研修を通じて高校生とのコミュニケーションスキル及び事業運営/評価の向上を図る。

### (3) 高校生の事業運営能力強化

① 事業ポスター作製研修

② プロジェクトマネジメント研修

◆ 高校生の事業計画及び運営にかかわる能力強化を行う。



ハイスクールピッチのポスター

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【広報力強化事業】

研修名:パブリックスピーキング研修(参加者:11名)

日程:12月27、28日(合宿形式)

内容:コムニス株式会社代表の蔭山洋介氏を講師として招聘。

高校生2チーム、大学生1チームでスピーチを作成し、1日目にフィールドワーク、スピーチ原稿作り、2日目に成果報告会をコンペ形式で行い、実践の場とした。

参加者のアンケートからは、「自分たちが何を伝えたいのかを、大事にしつつ聞く人たちにどう伝わるかという視点でスピーチを考えられるようになった」という感想が聞かれた。この研修のスライドをもとに高校生の活動を伝える広報冊子を作製。



合宿講義中の様子



合宿成果報告会の様子

### 取組2

#### 【事業の担い手育成】

1月18日:傾聴スキル研修開催(参加者:7名)

2月5日:SROI研修開催(参加者:8名)

2月22日:ファシリテーション研修開催(参加者:7名)

弊団体スタッフ、協力団体スタッフ、ボランティア向けに研修を実施。傾聴スキル研修では、個人の話す際の癖を知ることから、高校生との実際の傾聴場面の対応を考えることができた。



ワークの様子



ファシリテーション研修



SROI研修

### 取組3 【高校生の事業運営能力強化】

1月7日8日の2日間でイラストレーター、フォトショップ研修を実施。

参加者6名。ソフトを初めて使う参加者が多かったためワークを通して基本的な操作方法を学んだ。研修後、実際にイベントの参加者募集チラシを作成し、イベントの周知、参加者募集に役立てている。

2月18日19日の2日間でプロジェクトマネジメント研修を実施。参加者8名で事務所で行う。プロジェクトを立てるうえでのポイントを確認しながら学ぶ。

## 実施体制図

<提案団体>  
Bridge for Fukushima

特筆する役割  
・取組①②③の企画提案・全体運営総括・最終責任者  
・W/S・研修の主催

<協力団体>  
NPO法人コースター 郡山市  
NPO法人TATAKIAGEJapa いわき  
復興支援センターMIRAI 相馬  
NPO法人あすびと福島 南相馬

特筆する役割  
取組①:WS参加者募集・フォロー  
取組②:研修参加者募集  
取組③:高校生への周知

## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:**各研修後のフォローを含め、十分にサポートを行うことで、研修後すぐに研修内容を事業に生かすことができている。主に活動報告でのスピーチ、各プロジェクトに関する参加者募集ポスターの作成、高校生事業の円滑な運営のためのサポートが成果として挙げられる。

**今後の展望:**本年度は、弊団体が研修を主催してきたが、今後協力団体とさらに連携することで、的確に必要なとされている研修を行えるようにしたい。また、研修に参加したいという高校生・大学生からの要望も多く、今後も継続して研修・WSを開催することが求められている。

# 新たなツーリズム確立事業

(福島県二本松市) ～あぶくま農と暮らし塾～

## 対象とする地域課題

原発事故後の低調となっている地域内のグリーンツーリズムの活性化／新たな産業として始まっているブドウ栽培の活性化／果実酒製造の活性化

## 今年度の取組

**目的と概要** 原発事故が発生した福島県では、子供たちが主たる対象者であるグリーンツーリズムについては、原発事故以前の水準に回復していない状況である。そのような中、地域内では果実酒や地発泡酒の製造が始まる等の酒類による地域活性化と大人を対象にした新しいアルコールツーリズムへの期待が高まっている。本事業では、ワイン文化の定着を目指し、地域住民、農家民宿等を対象としたワインセミナー等を開催するとともに、先進地との交流及び意見交換会を通じ新しいアルコールツーリズムの手法を確立する。

## 内容

### (1) ソムリエ等ワインの専門家セミナーの開催(3回／年)

◆地域内でのワイン文化の定着を目指し、地域住民、農家民宿経営者等を対象としたセミナーを開催する。

### (2) ワインツーリズム先進地との交流会(1回／年)

◆新しいツーリズムの手法確立を目指し、先進地(甲州市勝沼)を訪れ、製造場ブドウ畑見学会を行うとともに、現地関係者との交流会を実施する。

### (3) 関係者間の意見交換と新しいツーリズムの試行(4回／年)

◆先進地との交流から得た学びを踏まえ、関係者との意見交換を通じ、地域における新しいツーリズムの手法を検討し、4回の試行を行い手法の確立を目指す。

### (4) マニュアルの作成

◆新しいツーリズムの手法を定着させることを目的に、マニュアルを作成する。



先進地交流会の様子

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【ソムリエ等ワインの専門家セミナーの開催】

ふくしま農家の夢ワインにて、ソムリエ等ワインの専門家を招聘し、ワインセミナーを4回実施した。地域住民、農家民宿経営者などのべ約100人ほどが参加した。ワインの地産地消、地元の食材とワインとの取り合わせ、ワインによるおもてなしのこころなど、ワインを活用した先進地の取り組みなどの話を聞き、講師への積極的な質問なども多数みられた。



### 取組3 【関係者間の意見交換と新しいツーリズムの試行】

平成28年7月から月1回ふくしま農家の夢ワインを会場に感謝祭として新しいツーリズムの試行を実施している。ワインセミナーを組み込み、地域内外からの参加者を募った。感謝祭を通して意見交換会を実施。



東和果実酒研究会ではほ場に関する協力体制。農家民宿においては宿泊場所の提供などそれぞれ連携することへの同意の場となった。

### 取組2 【ワインツーリズム先進地との交流会】

平成28年11月5日、6日に甲州市勝沼を訪問した。参加者6名がワインツーリズムに賛同している製造場やブドウ畑の見学や現地の関係者との交流を深めた。

大規模なワインツーリズムだが運営方法も視察することができた。

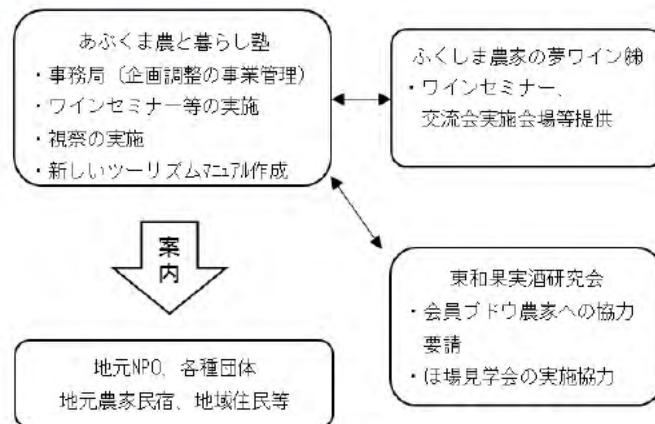


### 取組4 【マニュアルの作成】

新たなツーリズム(地域資源を活用したセミナー及びイベント開催)実施マニュアルとして、これまでの取り組みを企画、調整、周知、実施まで、実施体制図、工程表、進行表に基づき明確にわかりやすくまとめた。地域内の誰もがどこでも実践できるよう、各農家民宿へ配布した。これによって、小規模であるが農家民宿の企画する新たな取組も始まり、ワイナリーを訪れる回数が増えてきた。

都度、アンケート調査も実施し、次の機会に反映できるよう、取りまとめ、話し合いの場を設けていく。

## 実施体制図



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** 好評を得て当初の予定を上回り、取組1については4回、新しいツーリズムの仕組み構築に向けた関係者間の意見交換会も充実した会となった。ワインセミナーは回を重ねるごとに参加人数も増え、ワインを使ったお菓子作りも農家民宿で出せそうだという評価を得、地域活性化に向けて実績を上げている。

**今後の展望:** 協力体制の各団体との連携を密にし、回を重ねるごとに充実していけるよう、協議する場を多く取っていく必要がある。地域独自のツーリズムの発展のためにも、先進地の取り組みは取り入れるべきものが多くある。できるだけ多くの視察研修も必要。

# 公・民・学連携による自然文化資源を活かした農業・観光の再生

(福島県田村市) ～田村地域デザインセンター (UDCT) ～

## 対象とする地域課題

原発災害からの農業・観光の再生による、地域の環境と共に暮らし続けられる環境づくり

## 今年度の取組

**目的と概要** 行政、住民団体、大学らによる公・民・学連携のまちづくりセンター「UDCT」が中心となり、地域の自然文化資源を活かし地域の環境と共に暮らし続けていくことを目指し、地域課題である“農業”と“観光”の再生に取り組むため昨年度設立された2つの実行組織(まちづくり協議会)の取組である、①避難指示が解除された都路地域における農業を活かした地域再生、②観光資源あぶくま洞を有する滝根地域における観光と生活を結び付ける内外交流促進からの地域再生、について初動期の活動支援を通して地域への自立・定着を図る。

## 内容

### (1) 都路地域: 農業の再生

#### ① 農産物直売所社会実験の実施

- ◆ 地域課題である農業再生に取り組むため空き店舗等を活用して実施する。
- ◆ アンケート調査や売上調査による分析、農産物直売所の運営についての研修会も開催する。

#### ② パンフレットの作成

- ◆ 地域により継続して実施する事業計画を検討するとともに、検討経緯やノウハウや事業計画を共有することを目的にパンフレットを作成する。

### (2) 滝根地域: 観光(地域内外の交流)の再生

#### ① まちづくり協議会の継続的な開催

- ◆ 地域課題である観光再生にとりくむため住民による協議の場、意見交換の場として実施する。
- ◆ 駅舎の機能、プログラムおよび地域主体の運営計画の検討
- ◆ 駅舎整備の計画・設計について、専門家のサポートのもと市と協議

#### ② 検討経緯やノウハウや事業計画を共有するためのパンフレットの作成



農産物直売所社会実験  
(どーも古道店)



神俣駅周辺

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【都路地域：農業の再生】

#### ①農産物直売所社会実験の実施

平成27年11月から行っている農産物直売所・社会実験については継続実施している。

都路町まちづくり協議会において「直売所、加工品制作、六次化推進」、「直売所の今後の進め方」について協議を実施。

今年度初めに計画していた農産物直売所の本格実施に向けた取組については、関係者での合意がとれなかったため、来年度以降の引き続きの協議事項となっている。

#### ②パンフレットの作成

上記のとおり、関係者の合意がとれなかったため、本格実施は行えておらず、パンフレットの作成には至らなかった。



農産物直売所社会実験

### 取組2 【滝根地域：観光（地域内外の交流）の再生】

#### ①まちづくり協議会の継続的な開催

継続して神俣駅周辺まちづくり協議会および勉強・検討会を開催した。専門家の設計アドバイスのもと、計画案およびイメージを作成。地元意見の具体的なJR・市との設計協議、設計とりまとめへの反映した。

②駅舎検討に係る検討経緯、および、これまで議論してきた運営等の方針についてもまとめたパンフレット冊子を作成。

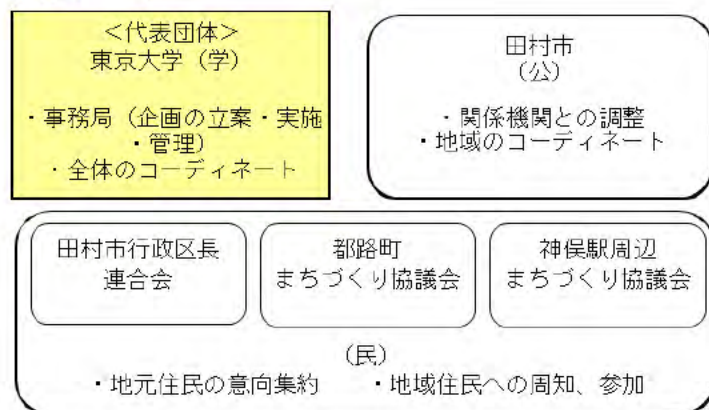


協議会での検討



駅舎内観イメージパース

## 実施体制図



## 事業の成果・今後の展望

### 【取組1】

**事業の成果:** まちづくり協議会による協議は継続して行ったことは成果であるが、当初に計画していた取組までには至らなかった。

**今後の展望:** 協議会参加者の合意形成が課題であり、再度、幅広いテーマで議論を行い、できることから具体的に取組んでいく予定である。

### 【取組2】

**事業の成果:** 駅舎の改修について、地元の意見をくみながらJR・市の協議を実施することが実現し、地元意見を反映した設計がまとめることができた。

**今後の展望:** 平成29年秋頃に改修工事完了予定であり、管理・運営段階でも、当協議会を中心とした地元の主体的な関わり方を検討する。 12

# 南三陸ローカルリソースラボプロジェクト

(宮城県南三陸町) ～任意団体南三陸ローカルリソースラボ～

## 対象とする地域課題

地域内における地域資源を活用したビジネス創出に関する基礎研究の不足

## 今年度の取組

**目的と概要** 地方において若者を中心とした人口減少の背景に、魅力的な稼げる仕事の不足がある。一方で、まだ開発されていない地域資源も山のように眠っており、この資源を面白いビジネスに変えることで、移住やUターンに繋げ若者を中心とした人口減少に一定の歯止めをかけることが出来ると考えられる。現状は、地域資源の可能性の可視化が出来ていないためアクションに繋がっていない。本事業では地域内外の専門家、有識者を中心に地域資源のビジネスの可能性を研究し可視化、発信することで、地域資源を活用したビジネス創出に関する知見を蓄積し、ビジネスの担い手を発掘する。

## 内容

### (1) 地域資源のビジネス化に向けた課題の抽出と構造化

#### ① フィールドワークの開催(1回/年)

◆ 課題の抽出を目的とし、専門家を南三陸町に招聘し、現場の視察と関係者のヒアリングを経てワークショップを実施。

#### 第1回 『NextCommonsLab南三陸プレフィールドリサーチ』

南三陸町の森林、木材加工会社、漁業協同組合、漁師の現場を回り、ヒアリングを行い、社会課題の整理と、ビジネス可能性探求のためのワークショップを実施。参加者1名。

#### ② 研究会の開催(1回/年)

◆ 南三陸の地域資源と地域課題を東京で多くの人と共有し、課題解決の担い手の発掘を実施。参加者38名。

#### ③ 地域資源ビジネス化研究読本の制作、発行

◆ 本事業で開発された地域資源のビジネスの可能性について、特に都市部のターゲットを想定した読本を企画・制作を実施。  
(合計800部)

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【都路地域：農業の再生】

#### ①フィールドワークの実施

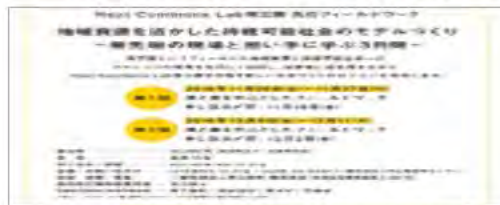
フィールドワーク(ツアー)単体の企画だけでなく、地域に人が流入する仕組みとして、Next Commons Labという枠組みを町で行っている地域おこし協力隊の来年度の募集の一環としてプロジェクトを立ち上げた。ローカルリソースラボはその入口として地域の資源に触れ研究するという位置付けである。ツアー実施は1回目が11月25日～27日、2回目が12月9日～11日に決定した。ツアーのチラシとWebサイトが完成し、インターネット上の広告を投下しながら現在集客を実施。しかしながら集客が思うようにいかず、2月7日、8日に延期を行い、②の研究会からの集客を図ることとした。研究会開催後のツアーでは、1名の参加者ではあったが南三陸の地域資源を活用した取組に大きく興味を持っていただけたようであった。

#### ②研究会の開催

1月22日に、サステナビリティ・デザイン2017と題して南三陸の地域資源と課題解決をテーマに研究会を開催した。38名の参加者が集まり、今後の南三陸の取組に大きく関心を高めたイベントとなった。

#### ③地域資源ビジネス化研究読本の制作、発行

Next Commons Labの入り口として、地域の課題と資源を紹介したパンフレットを800部作成した。



ツアー参加者募集のチラシとWebサイト



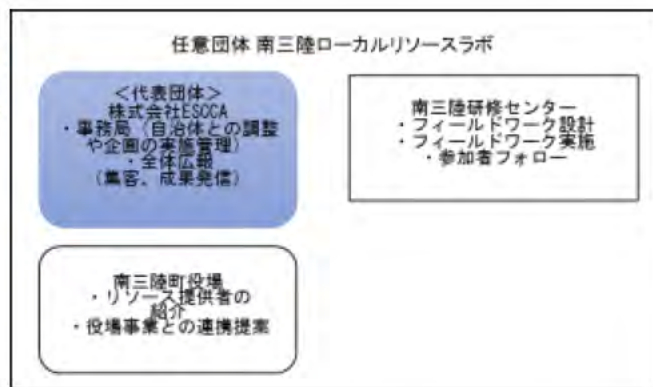
サステナビリティ・デザイン2017の様子



フィールドリサーチツアーの様子

### 実施体制図

南三陸町内の3団体をローカルリソースラボを構成。それぞれ民間、行政の立場を活かした連携によって事業を推進する。



### 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** ツアーの集客が想定よりかなり苦戦をしたが、その過程でFacebookのページに700名を超えるファンが購読者となった。今後の集客は多いにハードルを下げるができると思われる。

**今後の展望:** 東京の様々なイベントや団体と協業しながら、最終的に南三陸を体験していただく動きにしっかりと繋げていくことが重要と再認識した。本事業の研修でビジネスモデルキャンパスをベースに事業の振り返りを行ったがそれにより研究会→ツアーの流れを再認識することが出来た。この流れを活かして南三陸での地域資源を活かした起業家の呼び込みを本格的に行っていきたい。

# 実践型インターンシップを通じた産学官広域連携による普及モデルの構築

(岩手県大船渡市他) ～特定非営利活動法人wiz～

## 対象とする地域課題

地域及び企業の担い手となる若者人材の流出

## 今年度の取組

**目的と概要** 岩手県では地域・地元企業における若者の人材確保は重要な課題であるが、県内の若者は依然流出傾向にある。一方で、震災復興ボランティア等で関わった県外の若者は次の関わり方を模索する段階になっており、将来的な担い手が定着する仕組みの構築と、そのコーディネートを担当する機関が必要である。本事業は、昨年度「新しい東北」先導モデル事業として当法人で実施した実践型インターンシップを横展開し、広域連携による普及モデルを構築することにより、地域への若者流入、企業の課題解決促進、若者の岩手での活躍機会の創出を目指す。

## 内容

### (1) 県外大学との連携による普及モデルの構築

◆大学を訪問し、実践型インターンシップの周知、学生募集を行うと共に連携体制の構築に向けた打合せを実施する。

### (2) 県内における産学官広域連携による普及モデルの構築

- ①各自治体、大学を訪問し、連携体制の構築に向けた打合せを実施する。
- ②県内市町村を集めた会議体制を構築し、「実践型インターンシップ」を手段とした各自治体の施策を検討する場を設ける。
- ③自治体、商工団体等と連携し、地元企業を対象とした実践型インターンシップの事例説明会を実施する。
- ④自治体、商工団体等と連携し、地元企業を訪問し、実践型インターンシップの紹介、導入提案を行う。
- ⑤提案用のツールとして、特に自治体・地元企業を対象とした「実践型インターンシップ事例集」を作成する。



実践型インターンシップ事例集(抜粋)

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【県外大学との連携による普及モデルの構築】

#### ●実践型インターンシップ説明会実施大学(12大学):

青森大学(3回延べ494名)、桜美林大学(75名)、神奈川大学(3回延べ525名)、創価大学(20名)、東北芸術工科大学(2回延べ40名)、東北大学(2回延べ230名)、常磐大学(2回延べ50名)、日本大学(12名)、弘前大学(2回延べ60名)、福島大学(200名)、法政大学(40名)、立教大学(330名)、NPO法人ETIC主催説明会(立教大学連携)@立教大学(130名)、一般社団法人ワカツク主催説明会(東北大学連携)@仙台市民活動サポートセンター(15名)

⇒本事業を通じて、大学内で説明会を実施するための説明、打合せを密に行うことができ、説明会実施大学の拡大と、説明会の内容をより大学の意向や学生の興味、専攻等に沿ったものにすることができた。また、他団体と連携することでいっそう学内での周知を推進し、大学との連携につながった。過去に実践型インターンシップに参加した学生が説明会を企画したり、登壇して体験談を話したりし、学生同士の波及効果も生まれている

#### ●連携体制の構築に向けた打合せ実施大学(13大学):

青森大学、青森公立大学、青森中央学院大学、神奈川大学、杏林大学、東海大学、東北芸術工科大学、東洋大学、常磐大学、弘前大学、福島大学、明星大学、立教大学

⇒チラシ配架、掲示等の協力は得たものの、直接的な告知の機会には至らなかった大学もある。大学ごとのインターンシップにかかる重みの違いと、講義計画等に組み込むための打合せ時期を把握することができ、次年度の連携に向けた足掛かりを得ることができた



青森大学説明会の様子

### 取組2 【県内における産学官広域連携による普及モデルの構築】

#### ①各自治体、大学を訪問し、連携体制の構築に向けた打合せを実施

- ・打合せ実施自治体(県内11市町):大船渡市、陸前高田市、釜石市、紫波町、矢巾町、滝沢市、花巻市、山田町、岩手町、二戸市、葛巻町
- 今後の連携方針や、具体的な連携内容について検討を進めた
- ・打合せ実施大学(県内4大学):岩手大学、岩手県立大学、盛岡大学、富士大学
- 学生への周知方法について検討を進めた

#### ②県内市町村を集めた会議体制を構築、施策を検討する場を設ける

- ・10/20盛岡駅前アイーナにて開催。9自治体12名(大船渡市、陸前高田市、釜石市、紫波町、矢巾町、滝沢市、花巻市、山田町、葛巻町)と、実践型インターンシップ受入先2社、代表者2名が参加

#### ③自治体、商工団体等と連携し、地元企業を対象とした事例説明会を実施

- ・2/15二戸地域雇用開発協会・二戸公共職業安定所主催「採用活動・雇用管理研修会」に参加。地元企業20社程度へ事例説明会を行った

#### ④自治体、商工団体等と連携し、地元企業へ実践型インターンシップの導入提案

- ・10/18大船渡市の地元企業1社へ導入提案実施
- ・10/21一関市の地元企業1社へ導入提案実施
- ・10/28釜石市の地元企業1社と、花巻市の地元企業1社へ導入提案実施

#### ⑤「実践型インターンシップ事例集」の作成

- ・実践型インターンシップの概要と、4社の取組事例を掲載した事例集(8ページ)を250部作成。企業、自治体、大学へ配布

## 実施体制図

- 〈提案団体:特定非営利活動法人wiz〉
- ・県外大学、県内市町村・大学との連携構築に向けた打合せ
  - ・県内市町村を集めた会議体制の構築、企画、運営
  - ・自治体と連携した地元企業向け事例説明会の企画、実施

#### 自治体連携(県内11市町村)

〈大船渡市〉

- ・広域連携構築に向けた関係機関の紹介、調整
- ・先導モデル実施自治体からの取組事例紹介
- ・「新しい東北先導モデル事業」から連携

〈花巻市、紫波町〉

- ・広域連携構築に向けた関係機関の紹介、調整
- ・地元企業、住民への周知活動
- ・施策事例紹介

〈陸前高田市、釜石市、矢巾町、滝沢市、葛巻町、二戸市、岩手町、山田町〉

- ・広域連携構築に向けた関係機関の紹介、調整
- ・地元企業、住民への周知活動

#### 大学連携

〈岩手大学、岩手県立大学(県内COC+実施校)〉

- ・広域連携構築に向けた大学の紹介、調整
- ・学生への周知連携
- ・協賛事業の構築検討

〈盛岡大学、富士大学(県内大学)〉

- ・学生への周知連携

〈東北圏内、首都圏の大学(県外大学)〉

- ・学生への周知連携

県内の構成団体

県外の構成団体

## 事業の成果・今後の展望

### 事業の成果:

- ・昨年度までに説明会実施実績のある大学と、本事業を通じて新たに連携体制を構築し説明会を実施した大学のうち、合計6大学から学生10名のインターンシップ参加申込があり、継続的な連携構築に向けて進展した
- ・自治体間の取組共有のきっかけを作ることができた。施策意見交換会では面識のない担当職員同士も多く、担当職員間の関係性構築に向けた一歩となった
- ・地元企業へのアプローチ手法について自治体と共に検討を進めた
- ・地元企業への周知ツールとして「実践型インターンシップ事例集」を作成・配布することができた

### 今後の展望:

- ・説明会実施大学の拡大と学生への周知方法の検討を大学と共に進める
- ・実践型インターンシップ未実施の自治体に対して「地元企業への実践型インターンシップ導入意向調査事業」等を提案し、自治体との連携を推進する

# 東松島刺繍の街プロジェクト ～事業の定着と他地域への展開～

(宮城県東松島市) ～一般社団法人東松島みらいとし機構～

## 対象とする地域課題

産業の空洞化及び子育て世代女性の雇用創出

## 今年度の取組

**目的と概要** 本事業は、被災地の女性に生きがいと雇用を創出し、震災で失われたコミュニティの再生と参加者のメンタルケアに資することを目的とする。デンマークの伝統のクロスステッチ刺繍を復興支援として始めたサークル的な取組から、平成26年度、27年度と「新しい東北」先導モデル事業に採択されたことを契機とし、ビジネスとして立ち上げ成長軌道にのせるべく取組を図った。平成28年度は他地域への取組のモデル展開をしつつ、刺繍は数年かけて成長していくものである為、新しい技術を学び、技術を向上させながら発展を目指す。

## 内容

### (1)他地域への展開

- ①ワークショップの開催  
◆活動モデルの横展開や生産者の意識向上を図る。
- ②他の手作り品を生業としてる団体との交流  
◆他の団体の取組から得た学びを、今後の課題解決に発展させる。

### (2)ものづくり力の強化・成長

- ①デザイン・手仕事技術に関して専門家による研修会の開催  
◆自走に向けての商品企画力、制作技術力を習得し、商品単価の高い商品を作り出す。
- ②ミシンのリースとカフェへの設置  
◆震災によりミシンを手放した方にも対応できるよう、誰もがミシンを使える環境を整え、縫製の仕事を請負える生産者を増やし受注できる業務を増やす。
- ③老舗刺繍メーカーであるDMC社と刺繍カフェ運営の為の現状説明及び意見交換会を実施



## 個別の取組の詳細

### 取組1 【他地域への展開】

①8月、12月に石巻、埼玉にてワークショップ開催

石巻イベント:5回実施 27名参加/場所:イオンモール石巻

埼玉イベント:6回実施 15名参加/場所:レイクタウン

◆生産者が直にお客様と接する事で、ワークショップでは教え方を工夫しながら、販売ではニーズを知るなど、刺繍技術だけではなく事を学ぶ機会となった。また、ワークショップと商品販売と合わせて取り組み、パンフレットの配布を行い、ワークショップに参加されない方々にも、本取組を知って頂いた。

②他の手作り品を生業とする団体との交流

南三陸町歌津を活動拠点とされている、南三陸ミシン工房様と交流会を実施。工房見学、事務局の方から運営について、また活動されている方々との情報交換を行い、品質管理や、生産者確保など活動の悩みを話し合い、アドバイス交換など行った。またステッチガールズの製品も見て頂き、震災復興にとどまらず良いものを作り続ける事をお互いに目標としており、コラボ製品の開発を検討する事となり交流を継続している。



①ワークショップ\_石巻



①ワークショップ\_埼玉



②南三陸ミシン工房さま交流会

### 取組2 【ものづくり力の強化・成長】

①デザイン・手仕事技術に関して専門家による研修会の開催

・商品企画など協力して頂いている、岡田美里さん、刺繍図案作家の中谷さんをお招きしての研修会を実施。岡田さんからは作品をパネルにする技法を教えて頂き、作品をより魅力あるものとして魅せる、販売する方法を教えて頂いた。中谷さまから、リネン素材への刺繍方法や、今後のステッチガールズの発展として結婚式などで人気のあるウェルカムボードの製作の事業としての可能性についてなどの講義をして頂き、参加者同士で今後について討論を行った。4月下旬東京で行われるイベントから受注開始の予定。

・ミシンリース会社の方による、「お弁当袋」の製作講習会を開催し、今後のオリジナル商品展開に使える技術を学び、まずは個人オリジナル商品出品から開始。



・岡田美里さん研修会



・ウェルカムボード見本



・ミシン製作講習会

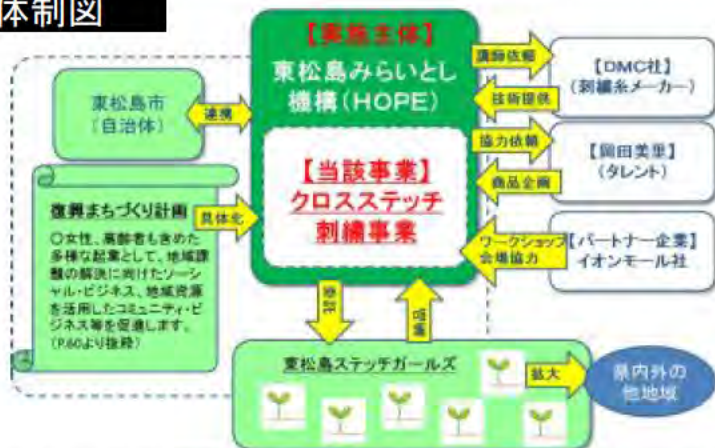
②ミシンのリースとカフェへの設置

ミシン6台をレンタルし、Caféに常設。企業から縫製業務を受託し、自宅で行えないステッチガールズも製作に参加する事が人員増強につながった。

③老舗刺繍メーカーであるDMC社と刺繍カフェ運営の為の現状説明

及び意見交換会を実施:3回(東京2回、仙台でのイベント会場にて1回)

## 実施体制図



## 事業の成果・今後の展望

事業の成果:他地域への展開として、隣市でありながら未開催の石巻、客層が異なる関東圏での販売会やワークショップを行った。昨年度までの事務局主導の運営ではなく、イベント内容の決定や準備を講師となるステッチガールズを主体とした事で、お客様のニーズに向き合い、検討するという主体性が他地域への展開の他にも成果として得る事ができた。イベント時だけではなく、運営している刺繍Caféで行うワークショップにも生かされており自立運営への一歩が踏み出せている。また南三陸町にて活動されている他団体様との交流会を通し、課題の共有化だけに留まらず、コラボ商品への発展の可能性へと繋がり、試作品の製作など現在も検討継続中である。

今後の展望:ステッチガールの活動拠点である刺繍Caféをさらなる「刺繍好きの人」が集まる場所としての発展を目指す。本事業で得られた成果であるステッチガールズのワークショップに対する主体性を活かし、それらを取り込みながら、ステッチガールズ主導の運営に取組んでいく。それにはCaféスタッフの技術、知識の向上も必要であると18もに、認知度を上げる施策も必要である。

# 地域住民と外部の若者の交流による町の「担い手」輩出事業

(岩手県陸前高田市広田町) ～特定非営利活動法人SET～

## 対象とする地域課題

地域での人口減少

## 今年度の取組

**目的と概要** 当団体では、広田町に不足している若者世代を町内に呼び込み、一人一人が築いた強い関係性を持つ地域住民との共同作業、交流の場行う「Change Maker Study Program」(以下CMP)という企画を実施してきた。これにより笑顔が増え、明日への活力を見出す町民の方々と、町に対して愛着を感じ継続的に広田町を訪れる若者や大学卒業後に移住を選択する若者が増えた。本事業において、CMPの継続と更なる発展により、外部の若者と心から幸せだと思える関係性をつくることで町民ひとりひとりが前向きになるとともに、外部の若者を獲得することで持続可能なまちづくりができる地域の実現を目指す。

## 内容

### (1)住民と大学生の地域課題解決型交流プログラム実施

- ◆「お手伝い＋広田町へのヒアリング＋暮らし体験」といった広田町住民と若者の交流型プログラムを夏季・春季と実施し、町に移住してくる若者が増えていく体制作りを目指す。

### (2)研修会開催

- ◆次年度以降の現地側で事業推進を行うプロジェクトマネージャーの育成のため研修会を開催する。
- ◆規模を拡大していくにつれて、現地側の体制整備やプロジェクトマネジメントを実行できる人材が3人以上必要不可欠になってくることが予想される。
- ◆また、移住者が増えてきた際に地域との橋渡しをしていく役割となるプロジェクトマネージャー兼現地コーディネーターが求められる。



交流型プログラムの様子

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【住民と大学生の地域課題解決型交流プログラム実施】

夏季CMPが終わり、春季CMPプロジェクトチームの立ち上げを行なった。大学生の参加者は総勢80人。2月27日から順次6プロジェクトを3週間で開始していく。地域の暮らしに入り込むことを大切に実施している。人口減社会における「町のあり方」に問題意識を置き、人口減社会を人口増社会に変えていくための解決策ではなく、人口が少なくなっていく中で、どうやったら豊かに暮らしていけるか？というところに対する「解」を見つけるきっかけの一つとしてこのプログラムをム設計してきている。大学生と地域住民との交流を通してまちづくりに楽しく参加できるきっかけを作り出している。このプログラムの1週間目が3月5日に終了したがその中で「この歳になると1日がすごい長い。これが昨日、今日、明日と続くと思うとぞっとする。だけど、あなたたちがくるとその時間があつという間に進むから楽しい！」という言葉をもらった。



3月5日春季 CMP実施中写真(2枚)

### 取組2 【研修会開催】

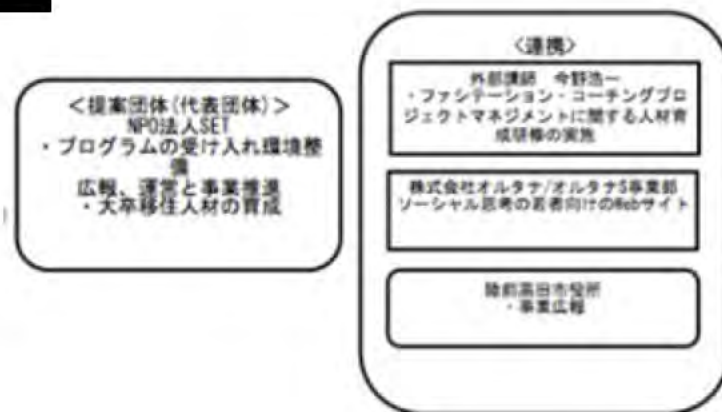
企業での研修を中心にプロジェクトマネジメントに取り組んでいる専門家の方を引き続きお招きし、プロジェクトマネジメントに関する講座を行った。11月はプロジェクトマネジメントの骨格となる考え方を伝えてもらいそれを元に次年度の計画を設計した。

振り返りを細かく実施し、成果物のクオリティコントロール、各担当するプロジェクトのスピード強化を行い、各々が足りないスキル面に関しては個別でのセッションを行った。



11月19日 プロジェクトマネジメント講座での成果物

## 実施体制図



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** 今期2名のプロジェクトマネージャーの育成を実施し、ファシリテーション、プロジェクトマネジメントに関する基礎はインプットし、CMPを実践場所として、これまで1名で実施してきたよりも3プロジェクト多く(昨年3月に比べ)実装でき、目的だった町に移住してくる若者が増えていく体制作りに関しては今年5名来年以降は3名を達成した

**今後の展望:** 引き続き実践によるタイムリーなフィードバックを通じ、次年度は新たに今回得たことを体系化し、人材が育ち続ける基盤強化を事業の推進と共に引き続き行う。課題としては、現状のプロジェクトの規模感でコーディネーターが育つ仕組みがないことが挙げられる。再現性の高い地域内でのプロジェクトを目指すために、今回育成したプロセスをより効果的にしていくことが求められる。

# 先進地域から学ぶ新しい東北オンパク地域モデルの形成事業

(宮城県石巻市他) ～「石巻に恋しちゃった」実行委員会～

## 対象とする地域課題

震災前から低下していた地域愛の醸成／震災で失われた自信の回復／コミュニティの繋がり強化

## 今年度の取組

**目的と概要** 当団体は、地域住民が主役となる体験交流型まちづくりプログラム「オンパク」手法をもとに、石巻地域で「石巻に恋しちゃった事業」を展開中である。現在は宮城県復興応援隊設置業務で実施しているが、2017年3月の委託終了以降も継続していく為に、運営の自立化が課題である。当事業では、経済的な持続性を獲得している現時点で全国唯一の成功事例である「長良川おんぱく」を訪問し、その収益構造や運営体制を学び、石巻の課題や地域性に合わせて応用、震災以降の東北各地でも参照できる運営モデルを作ることとする。

## 内容

### (1) ワークショップの開催(5回／年)

◆先進事例である「長良川おんぱく」からノウハウを学び、石巻・東松島・女川地域における独自の「オンパク」手法の運営モデル策定を目指す。

第1回 先進事例地域についての訪問前、事前勉強会の開催(※宮城県復興応援隊設置業務で実施。)

第2回 今年度の石恋(11月)開催結果の振り返り、今後の課題と長良川おんぱくでの研修内容の検討。  
(※宮城県復興応援隊設置業務で実施。)

第3回 先進事例の実施地域「長良川おんぱく」(岐阜県岐阜市)を訪問し、実施主体関係者との意見交換および研修。  
(※本事業)

第4回 上記を受けて、「長良川おんぱく」の収益モデルの分析と、その石巻地域での応用の検討。  
(※宮城県復興応援隊設置業務で行う。)

第5回 上記実施結果について、評価と今後の課題を整理。(※宮城県復興応援隊設置業務で実施。)

### (2) 運営手法のマニュアル化

◆「長良川おんぱく」からの学びを石巻で応用するためのマニュアルを作成する。(※宮城県復興応援隊設置業務で実施。)

### (3) 「長良川おんぱく」研修の報告会の開催(※宮城県復興応援隊設置業務で実施。)

### (4) 関係者向け研修会の開催(※宮城県復興応援隊設置業務で実施。)

◆事例の紹介や具体的なノウハウの紹介のための研修会を実施する。

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【ワークショップの開催】

第1回目は12月5日開催(11名参加)、第2回目は12月13日開催(37名参加)、第3回目は12月16-18日開催(12名参加)。第4回目は1月25日開催(4名参加)、第5回目は2月10日開催(8名参加)。

11月～12月にかけて開催した第9回「石恋」の結果を踏まえ、長良川おんぱくでの研修で学びたい点を事前勉強会にてあらかじめ整理し、3日間の研修ではそれらを中心に掘り下げて視察することができた。また、視察を経て、今後の課題を、地域の観光協会らとともに共有することができた。



岐阜市観光コンベンション協会の方のお話

### 取組3 【「長良川おんぱく」研修の報告会の開催】

1月30日開催(33名参加)。

長良川おんぱくの研修報告会を開催し、地域の達人やボランティアその他多くの方が参加してくれた。観光協会や石巻市観光課の方も参加し、報告を踏まえ、今後の石恋の在り方について、活発な意見が述べられた。

### 取組2 【運営手法のマニュアル化】

1月から2月にかけて実施。15ページ。

過去9回まで開催してきた現在の事務局体制による運営手法をまとめ、今後、事務局スタッフ以外のステイクホルダーが運営に携わるときの手引きとなるようマニュアルを作成した。

### 取組4 【関係者向け研修会の開催】

2月19日に開催(18名参加)。

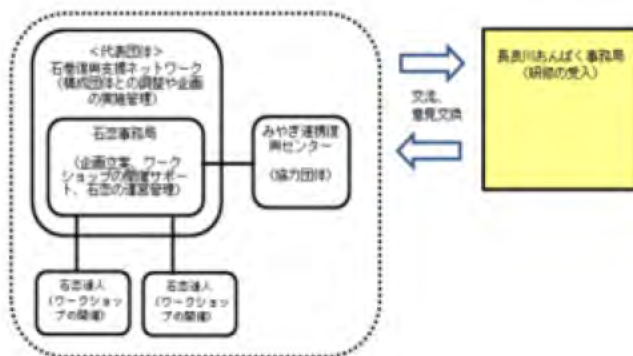
取組2で作成したマニュアルをもとに、石恋運営方法についての研修会を開催、マニュアルをもとに石恋のプログラムを企画するワークショップも実施した。そのワークショップで生まれた企画は、グループが主となって、3月中に試験的に実施予定である。



班に分かれてのワークショップの様子

## 実施体制図

石巻復興支援ネットワーク内の石恋事務局が中心となり、石恋達人やみやぎ連携復興センターの協力を得ながら、研修及びWSを実施。



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** 今回の「長良川おんぱく」視察研修により、その開催モデルのポイントについて理解することができた。その要点は、多様なステイクホルダーを巻き込みながら開催すること、「長良川おんぱく」開催で得たネットワークその他を活かして、収益事業を行うことである。それを踏まえ、今後の石恋開催マニュアルを作成、年内に予定している次回石恋の開催に向け、関係各位と協議を進めることができています。

**今後の展望:** 今春に設立される「DMO法人」、以前から在る観光協会、我々の石恋など、地域で観光振興を行う組織が混在している。また、リボーンアートフェスティバルやツール・ド・東北等の大きなイベントも予定しており、それらが地域の中でどう連携していくか、今回の事業で得たことを活かし、ステイクホルダー同士で協議しながら進めていく。

# 仮設住宅避難高齢者のアクティブヘルス推進事業

(福島県浪江町他) ～特定非営利活動法人福島県レクリエーション協会～

## 対象とする地域課題

仮設住宅避難高齢者の体力低下や生活不活発病の解決につながるアクティビティを、県内各地の高齢者の積極的な健康づくりに活かすこと

## 今年度の取組

**目的と概要** 福島県内では多くの方々が未だ仮設住宅、借り上げ住宅での生活を余儀なくされている。仮設住宅に残る方々は、高齢で借り上げ住宅等に移って生活を再建することが困難な方が多く、年齢的にも体力的にも多くの課題を抱えている。昨今、「健康寿命の延伸」が叫ばれる中、仮設住宅避難高齢者へのアプローチは全体的に遅れがちである。本事業では、困難な状況にあるこれらの方々の健康づくりの手法を開発し、その他被災地以外の地域に居住する高齢者の健康づくりにも活かすことを目的とする。

## 内容

### (1) 実践研究会・セミナーの開催

- ◆ 仮設住宅に居住する高齢者の健康増進、役立ち感増進のため、実践研究会のチラシ作成と開催、介護予防・認知症予防セミナーを開催する。



実践研究会の様子

### (2) 意見交換・インストラクター派遣

- ① 先進地での意見交換
  - ◆ 高齢者の健康寿命の延伸、介護予防、認知症予防に役立つアクティビティ・プログラムの開発を図る。
- ② 被災地以外の地域へのインストラクターの派遣
  - ◆ 高齢者の健康寿命に取り組むインストラクター等関係者の増加及び質的向上を目指す。

### (3) 素材集の発行

- ◆ 素材集を発行し、被災地での活動の成果を県内各地へ拡大する事業とする。

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【実践研究会】

6月から10月まで、毎月1回、計5回にわたり開催した。会場を仮設住宅集会所に設定し、仮設住宅入居者の方々の健康増進とそのために役立つ素材の勉強会を開催した。訪問事業自体は、その後もいくつかの仮設住宅や復興住宅で現場で継続され、実践研究会の成果を検証することができた。

外部講師を招聘しての、介護予防、認知症予防セミナーは、1月、2月に実施した。事前に集団を介した支援(グループワーク)について7月に実施することができていたため、介護予防、認知症予防の内容についても十分に理解できる結果となった。



外部講師による講習会



仮設住宅における実践研修会

### 取組2 【意見交換・インストラクター派遣】

先進地における意見交換は、健康づくりの自分事化を進めている新潟県と、仮設住宅での事業が数多く継続されている岩手県の担当者を訪ね、意見交換をすることができた。それぞれに特色のある事業が行われており、今後の本県での取り組みに参考となることが多かった。

アクティブヘルスを拡大するためのインストラクターの派遣は、最終的に8回となった。また、自治会等の依頼もあり、復興支援住宅の訪問が定着している。

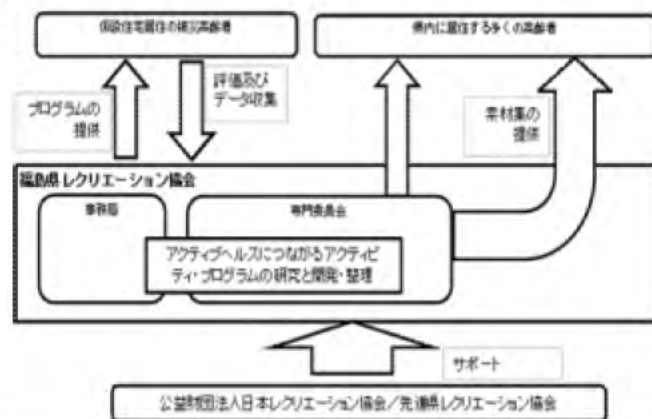


インストラクターへの派遣の説明

### 取組3 【素材集の発行】

素材集発行のための素材の取りまとめは進み、2月末日に発行することができた。県内市町村の健康づくり担当者や介護予防に関わるレクリエーション・インストラクター等に配布し、活用を促す。

## 実施体制図



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** 本事業を実施することでこれまで招聘できなかった高名な講師を招聘することができ、介護予防・認知症予防事業のバックグラウンドとなる理論をしっかり研修できた。その結果、現場での内容も充実され、結果として素材集を発行し、関係者に意識付けできたことは大きな成果となった。

**今後の課題:** 本県は、健康寿命の長さではワースト10に入っている。レクリエーション活動の効果を活用して、楽しく介護予防、認知症予防を行うことで健康寿命の延伸を目指すため、アクティブヘルスの内容をさらに啓発することが今後の課題である。

# 「キッズ防災キャンプの立上げに向けての研修・プログラムづくり」

(宮城県石巻市他) ～NPOぐるぐる応援団～

## 対象とする地域課題

東北エリアにおける子どもたちを守るための知見と訓練の充足／意識は高まりだけではなく、実際に行動できる人材の育成

## 今年度の取組

**目的と概要** LEARNING FOR SURVIVAL ～“生き抜く”ために“身につけよう”～ 当団体では、緊急時に自分の身と命を守る方法を知り、行動をできる子どもたちを育てていくため、子どもにとっていつもの日常である「遊び」の要素を取り入れ、楽しみながら防災を学べる機会を提供してきた。本事業では、実践的な方法を学び、スキルを高めるとともに、参加者から参加費をもらえるキッズ防災キャンプを立ち上げることで、継続的な事業の構築を目指す。

## 内容

### (1) キッズの防災の取組の先進事例先との交流、勉強会 (コドモ・ワカモノまち-ing、全日本拳法会、宮城復興支援センター)

- ◆ 打合せを兼ねたリーダークラスのキッズプログラムの企画に関わる意見交換を実施。
- ◆ 先進事例関係者へ訪問し、交流の機会を設置。静岡や浜松では、民間のスポーツ団体の取組が全国の小学校での授業の中に取り入れられた事例をヒアリング。
- ◆ 日本で最大級のキッズ防災イベント「NHK防災パーク」へ参加。被災した人たちと共に具体的な取組や子どもたちの反応を視察。



被災経験者と「NHK防災パーク」へ参加。研修も実施

### (2) 防災キャンププログラムづくりワークショップ (3回／年)

- ◆ 防災キャンプのプログラムに関わる人を増やし、人材の育成をしていくことを目的に、スタッフやボランティアを集めて勉強会やワークショップを実施(計5回のワークショップ)。
  - ・ (1)も併せ6～9月には東北で被災経験者の声を聞き、プログラムの中核となるコンセプトを固める。
  - ・ 12月～2月には、それらのコンセプトを軸としながら、どのようなプログラムをつくっていくか議論。



防災アクティビティをフィジビリティスタディとして実施

### (3) 子どもたちが遊びながら防災を学ぶアクティビティの実施、防災キャンプに向けた事前研修の実施

- ◆ キッズ防災キャンプの実現のため、スタッフやボランティアをどのように巻きこんでいくかを検討し、合意形成を行う。11月上旬にDODAボランティアフォーラムにてボランティア等の呼びかけも実施。

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【キッズの防災の取組の先進事例先との交流、勉強会】

◆リーダークラスのキッズプログラムの企画に関わる意見交換

・プログラム例や取組のコンセプト等の意見交換、交流を実施

[日時] 6/18、11/3～11/6、1/18

[場所] いしのみ☆キッチン、新宿、仙台 [参加者] 5名、4名、4名

◆先進事例関係者へ訪問し、交流の機会の設置:

・静岡や浜松では、民間のスポーツ団体での取組から、全国の小学校での授業の中に取り入れられた事例をヒアリング。

[日時] 10/28、10/29 9:00～15:00 [場所] 静岡、浜松 [参加者] 5名

◆日本最大規模のキッズ防災イベント「NHK防災パーク2016」に参加

・具体的な取組を目にすることで、こどもたちのリアルな反応を感じることができた。年齢や内容によって反応が変化することを実感。また、被災した人たちと学ぶことで、具体的な課題感を共にした。

[日時] 8/27、8/28 10:00～16:00

[場所] NHK放送センター@東京都

[参加者] 7名、7名

・タイプの違う実績を持つ団体3つとの交流を持ち、プログラムについて意見を交換することで、様々な目線を持てた。



「NHK防災パーク」防災ポーチづくりワークショップ

### 取組2 【防災キャンププログラムづくりワークショップ】

被災経験者と「震災経験」「こどもたちに伝えたいこと」をテーマに話し人を巻き込むことができた。東北だけではなく、東京等、エリアを超えて協力者を増やすために取り組み、実際に11名が運営に参画。

[日時] ①9/25 16:30～19:30 ②9/26 15:30～17:30

③10/2 20:30～21:30 ④10/3 10:30～11:30

④12/21 22:30～ ⑤2/26 11:00～18:30

[場所] ①喫茶去Hama ②ライブラリーホテル仙台駅前

③アイトピア通り ④川崎 ⑤Yahoo! ロッジ

[講師] ①②中西仁美 ①③星野諭

[参加者] ①6名 ②5名 ③25名 ④3名 ⑤5名



カテゴリー別にテーマを整理

### 取組3 【子どもたちが遊びながら防災を学ぶアクティビティの実施及びキッズ防災キャンプの立ち上げに向けた事前研修の実施】

『防災キャンプのコンセプト、ビジョンなどの意見交換、先進事例紹介』

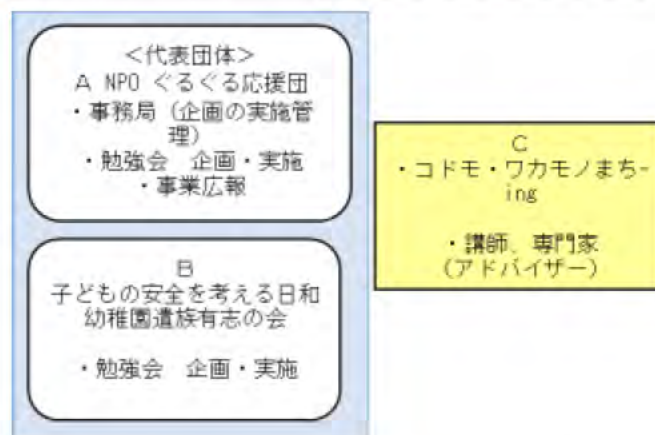
[日時] ①8/3 9:30～14:00 ②8/26 18:30～19:30 ③12/22 19:00～21:00

[場所] ①いしのみ☆キッチン@石巻市 ②千駄木 ③京橋トラストタワー

[講師] ①②③コドモ・ワカモノまち-ing ③宮城復興支援センター

[参加者] ①8名 ②6名 ③11名

## 実施体制図



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:**今年度は、具体的に先進事例を持つ団体と交流を行ったり学んだりする中で事業の核となるコンセプトをつくった。これまでは、被災した現場の緊急的なニーズに応え、準備ができないままスタートせざるをえない事業が多かった。本事業により「こどもの防災」に関して、事例をしっかり把握した上で、事業戦略を立案できる意義は大きい。自立的な事業をみずえ、差別化のポイントなども明確にしていけることもできた。

**今後の展望:**アクティビティを具体化していきながら、プレデーキャンプを実施。PDCAをくり返しながら具体化していくと同時に、ファンディング等事業の本格的な立上げを行う。

# まちづくり会社による地域密着店舗運営で自立コミュニティの復興

(福島県いわき市) ～ふるさと豊間復興協議会：豊間区：豊間協働加工販売会～

## 対象とする地域課題

区画整理後の帰還住民が激減し日常店舗の再開者がゼロの中、日常の暮らしを支える店舗等を地域住民の協働で運営すること

## 今年度の取組

**目的と概要** いわき市豊間地区は震災前620世帯のうち約400戸が津波で流失した。土地区画整理事業による宅地の完成が平成28年度後半から翌年度に行われるものの住宅再建者は激減している。当団体は、住宅再建の支援及び新規入居者の受け入れを含め、新たなコミュニティの再生に取り組んでいる。しかし、暮らしに必要な店舗の再開者はゼロであり、家業という形態での運営は困難である。そこで、本事業において、地域住民の協働によるまちづくり会社を設立し、コミュニティ及び地域の自立に必要な施設の整備と運営を地域の協働の力で行うことを目指す。

## 内容

### (1) アンケート調査・グループヒアリング

- ◆コミュニティ再生、地域自立に必要な施設の整備運営に向け、いわき市豊間地区全住民を対象とした暮らしに必要な施設に関するアンケート調査及び世代別のグループヒアリングを実施する。



仮設店舗のイベント風景

### (2) 仮店舗運営・実証実験

- ◆協働加工販売会の運営戦略会議の開催により、地域の自立につながる専門家による特産品づくり・惣菜づくりの推進、ノウハウを受ける。



特産品の試作風景



運営戦略会議

### (3) まちづくり会社設立準備会議

- ◆まちづくり会社設立に向けて会議を開催する。また専門家によるまちづくり会社設立と施設整備についてのアドバイスを受ける。

### (4) 先進事例先との交流

- ◆施設内用、運営の実態・ノウハウの蓄積、交流を図るため先進事例施設を往訪する。



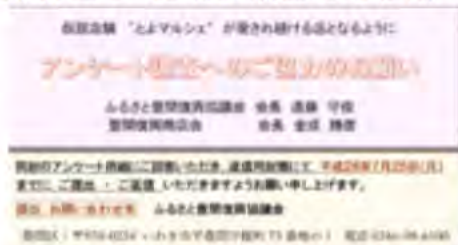
区画整理事業の鳥瞰図

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【アンケート調査・グループヒアリング】

仮設店舗の4店舗について、利用度合及び商品要望についてのアンケート調査を7月に実施。420世帯に配布、回収率約30%。本設に向けての課題についての検討材料を得た。併せて 地域の協働での店舗運営の必要性をアピールした。

アンケート調査を受けて、詳しい課題を検討するため、世代別のグループヒアリングを実施し、品揃えについての評価と要望をまとめた。(11月11日;高齢者10名、2月5日;子育て世代10名)



利用度合及び商品要望アンケート調査票

### 取組3 【まちづくり会社設立準備会議】

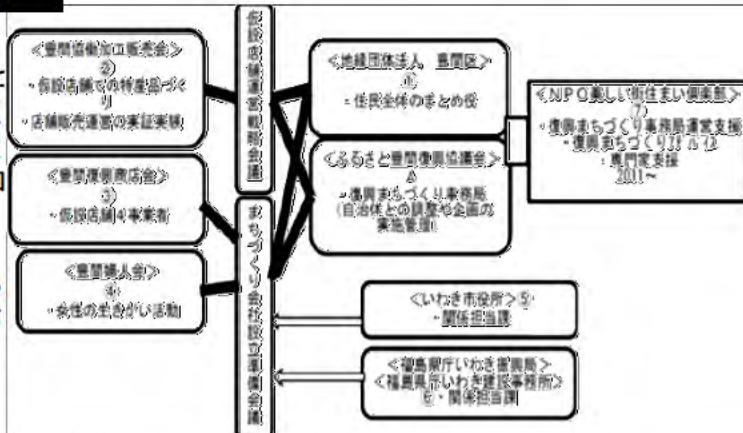
まちづくり会社設立に向けて準備会議を3回(9月8日;区役員等10名、11月19日;20名、12月9日;10名)開催し、まちづくり会社の類型とその課題を検討した。本施設の内容について、専門家のアドバイス(2回、11月9日;10名、1月28日;協議会30名)を受けて、拠点地区の概略の構成を作成し、まちづくり会社の必要資金、運営方法を検討していくための材料を整えた。



拠点地区概略設計

### 実施体制図

豊間区が住民全体の意向のとりまとめ、ふるとま豊間復興協議会が推進役となる。豊間協働加工販売会、豊間復興商店会がまちづくり会社の母体。婦人会、行政、まちづくりNPOが支援の体制を組む。



### 取組2 【仮店舗運営・実証実験】

仮設店舗運営の実証実験(週2日⇒週4日)を推進するために、協働加工販売会の運営戦略会議を定例で開催(毎週1回)、協働加工販売会議を月1~2回開催し、特産品の加工体制(さんまのポーポー焼きと佃煮、ウニご飯、アサリご飯)、販売拡大方法についての検討を進めた。また、専門家による特産品づくり・惣菜づくりのノウハウや商品陳列、パッケージデザインについてのアドバイスを受けた。(2回実施:7月8日;対象16名、1月27日;対象14名)



商品陳列方法の改善



新商品の試作、比較



さんまのポーポー焼き、佃煮のパッケージデザイン

### 取組4 【先進事例先との交流】

施設内容、運営の実態・ノウハウの蓄積、交流を図るため先進事例施設(子育て応援施設を含む)を往訪した。(2月15日実施、参加者15名)

◆訪問先;はたけんぼ(須賀川市直売所)、本宮市えぽか(子育て支援課)、さくらんぼひろば、こども文庫井筒屋(いどばたファミリーセンター)



本宮;さくらんぼひろばでの子育て支援の視察・説明

### 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:**特産品の加工体制、商品の陳列方法、アピール方法など店舗の運営方法について多くのノウハウを蓄積し、これらの実証実験、まちづくり会社の基本的な考え方の理解、拠点地区の概略施設構成の作成が進んだことで、地域住民の協働によるまちづくり会社の設立による地域の自立に必要な施設の整備と運営を地域の協働の力で行う可能性が確認された。

**今後の展望:**地域の高齢化が急速に進んでいるため、子育て世代の定住促進が地域の新たな緊急目標となっている。子育てママへのノウハウの継承、働き場所の提供等がまちづくり会社の新たな役割ともなり、拠点地区の本格的整備運営に向け、子育て応援施設を併せて整備することが求められる。この新たな役割に向けた事業内容、事業計画の再検討を推進する必要が出てきており、高齢者のがんばりに加え、若い世代の参加の可能性を広げることとする。

# 「オーストリアの事例に学ぶシンポジウム『コミュニティ・カーシェアリングの幕開け』開催

(宮城県石巻市) ～一般社団法人日本カーシェアリング協会～

## 対象とする地域課題

コミュニティ形成／交通弱者／過疎化／高齢化

## 今年度の取組

**目的と概要** 震災後のコミュニティの崩壊や高齢化の加速化が課題として残る石巻で、地域で車を共有し助け合うことでコミュニティ形成や後期高齢者の移動支援等を実現する型を昨年度の「新しい東北」先導モデル事業で産官学連携のもと構築した。本事業では、当協会と同じコミュニティ型カーシェアの先進事例であるオーストリアのCARUSO及びその分野の研究者(石巻出身)を招き「コミュニティ・カーシェアリングの幕開け」をテーマにシンポジウムを行うことで、石巻発のこの分野に注目を集め、ノウハウ共有により「型」の質を高め、国内外での横展開を目指す。

## 内容

### (1)公開シンポジウムの開催

- ◆「コミュニティ運営型カーシェアリングの先進的事業者であるオーストリアの「CARUSO」創業者とその分野の研究者を招き、コミュニティ運営型カーシェアリングの公開シンポジウムを開催し、石巻のコミュニティ・カーシェアリングのモデルの質の向上、交通事業者との具体的な連携、横展開を含む今後の展開に向けての可能性と課題について検討がなされる機会を作る。

### (2)現場視察による事例紹介・交通機関関係者との意見交換会の実施

- ◆石巻のコミュニティ・カーシェアリングを推進する「石巻エコEVカーシェアリング検討委員会」メンバー、地元交通事業者、交通に関する専門家を対象とし、石巻とオーストリアのコミュニティ・カーシェアリングの事例を現場(石巻)から紹介するとともに、石巻市の抱えるモビリティの課題を共有し、その解決に向けた具体的な連携を目指すための意見交換の機会を作る。

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【公開シンポジウムの開催】

10/8に石巻市議会委員会室にて「第一回『コミュニティ・カーシェアリング』シンポジウムin石巻」を開催。

【実施場所】…石巻市議会委員会室

【参加者】…64名

【プログラム】…亀山市長・復興庁挨拶、日本カーシェアリング協会 吉澤武彦 報告、ウィーン工科大学 柴山多佳児 基調講演、CARUSO クリスマン・スティーガー・フォーメッツ 特別講演、東北大学 鈴木高宏 講演、(株)NTTデータ東北 榎部昌弘 講演、政策研究大学院大学 家田仁 講演、パネルディスカッション

【展示】…石巻市、石巻市専修大学、(一社)電気自動車普及協会、文部科学省東北復興次世代エネルギー研究開発プロジェクト

【成果】…カーシェアリングという新しい交通の選択肢を多くの方に知ってもらうきっかけとなり、また単なる交通手段のみならずコミュニティを形成するツールにもなることが石巻市から発信できた。『コミュニティ・カーシェアリング・ネットワーク』を設立し、CARUSO及び関係者との継続的な協力体制を構築できた。

### 取組2 【現場視察による事例紹介・交通機関関係者との意見交換会の実施】

10/7にコミュニティ・カーシェアリングの現場視察、利用者との座談会、交通事業者の意見交換会を開催。参加者は石巻に関わる交通事業者よりJR東日本、宮城交通(株)、(株)ミヤコーバス、石巻市タクシー協会、(株)桃生交通が参加。他にも復興庁、東北大学、石巻市(石巻市エコEVカーシェア検討委員会メンバー)、またオーストリアから「CARUSO」創業者のクリスマン・スティーガー・フォーメッツ氏も来日し、主催側も含め、21名での意見交換会を実施した。

【実施場所】…吉野町復興住宅、石巻市役所臨時会議室

【参加者】…23名

【成果】…各交通事業者に「コミュニティ・カーシェアリング」について詳しく説明することができ、また、オーストリアの事例等と比較した市全体のモビリティを共に考える機会を得たことで、共通のテーマを共有することができ、今後の具体的な連携を行うための礎を築くことができた。



↑座談会の様子(吉野町復興住宅において)

## 実施体制図

【主催】…『コミュニティ・カーシェアリング』シンポジウム実行委員会  
共同代表…日本カーシェアリング協会 吉澤武彦、CARUSO クリスマン・スティーガー・フォーメッツ、石巻専修大学 竹中徹、東北大学未来科学技術共同研究センター、ウィーン工科大学、(株)CDS経営戦略研究所、ジェイティップス(株)

【共催】…石巻専修大学、東京大学 次世代モビリティ研究センター、東北大学未来科学技術共同研究センター

【協力】…特定非営利活動法人ITS Japan、ウィーン工科大学、石巻エコEVカーシェアリング検討委員会、(株)NTTデータ東北、(一社)電気自動車普及協会、(公財)国際交通安全学会

## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:**シンポジウムには、バス、鉄道、タクシーなどの地元の交通事業者からも多く参加いただき、それぞれの立場からの意見交換を行うことができた。また、今回のシンポジウムで『コミュニティ・カーシェアリングネットワーク』の設立に至った。

**今後の展望:**次年度はドイツで開催される交通フォーラム内でのシンポジウム開催を目指す。また、CARUSOとの継続した情報共有を行い、交通事業者との具体的な連携やCARUSOを参考にしたユーザビリティの向上を進めていく。

# 石巻に文化の風を。地産地消「金華アート・プロジェクト」

(宮城県石巻市) ～特定非営利活動法人にじいろクレヨン～

## 対象とする地域課題

震災以前より芸術をめざす若者にとっての学びや雇用の場の不足／人材の流出／日常的に芸術に触れる機会の欠如

## 今年度の取組

**目的と概要** 漁業や商業、造船、製紙などの業種で栄えてきた宮城県石巻で、仙台や東京に流出しがちな芸術家を志す若者の活躍の場を生むとともに、アートを通じて豊かで多様な価値観を認め合える社会づくりを目指す。具体的な取組としては、「アートの地産地消」が実現できるロールモデルを構築する。陶芸・木工の専門家や地元大学と連携し、石巻・金華山にちなんだ「金華ブランド」を確立。地元で採れた素材(粘土・木材)にこだわり、地元出身・在住作家がデザイン、製作した陶芸・木工作品を社会に発信、販売。市民が芸術に触れる機会を提供する。

## 内容

### (1) 先進地訪問及び講師打合せ(平成28年7月)

- ◆本事業の情報収集のため、先進地(山口県長門市、盤石窯およびクラフトナカシマ)を訪問する。
- ◆実際に、陶芸、木工のプロ作家の工房を3日間視察するほか、ワークショップ講師として石巻訪問する際の打合せを行う。

### (2) 素材収集(土・灰)、第1～5回ワークショップ(平成28年8月～平成29年1月、石巻市)

- ◆土堀り、粘土精製、作陶、素焼き、釉薬作り、本焼きなど制作を行う。
- ◆第3回の作陶の回に、先進地から講師を招聘する。

### (3) 作品おひろめ食事会(平成29年3月、石巻市「のくのくハウス」)

- ◆月一回定期開催している地元中高生向けイベントの中で、完成した食器を使った食事会を開催する。

### (4) 展示会(平成29年2月、石巻市ギャラリー:千金堂千の杜学びのホール)

- ◆本プログラムで完成した作品の発表、陶芸作品が出来るまでの紹介、ワークショップの実施。

### (5) 振り返り(平成29年2月、NPO法人にじいろクレヨン)

- ◆本プロジェクトの実施結果を振り返り、評価と今後の課題をA4用紙5枚程度にまとめ、次年度以降の参考にする。

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【先進地訪問及び講師打合せ】

山口県長門市磐石釜およびクラフトナカシマの両工房を7月に3日間訪問し、ワークショップ講師として石巻へ訪問していただく際の打ち合わせを実施した。11月10～13日の4日間講師を招き、10、11日にはスタッフ向け研修を実施、12、13日には地域住民を対象とした実践的なワークショップを開催した。

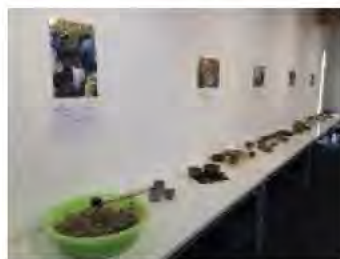
### 取組3、4 【作品おひろめ食事会】【展示会】

当団体が運営する児童館で月1回行っている中高生対象とした食事会で、本プロジェクトで作った食器を作成し平成29年3月から使用予定。

本プロジェクトで出来上がった作品の展示会を開催し、石巻市内のギャラリーにて平成29年2月にて3日間展示し、のべ90名の方が来場した。



＜中高生対象のご飯会の様子＞



＜陶芸作品展の様子＞

### 取組2 【素材収集・第1～5回ワークショップ】

焼き物作りの全容を体験でき、地元素材にこだわり地産地消に根ざしたワークショップを全5回開催した。

全5回のワークショップの参加者は子ども29名、大人13名のべ45名となった。参加者からは、地元の素材で陶芸が出来ることへの驚きや、石巻でアートに触れる機会が多くなることを期待する声も聞かれた。

また、第3回では山口からワークショップ講師を招き、職人の技術を間近で見学し、触れる機会を設けた事で陶芸の奥深さと創作することの魅力により周知することが出来た。



＜講師の指導を受ける子どもの様子＞



＜成形する参加者の様子＞

### 取組5 【振り返り】

本事業で実施したワークショップ(全5回)と、展示会の振り返りと評価と今後の課題をまとめた。

## 実施体制図

NPO法人にじいろクレヨンが連携団体、専門家と連絡調整を行い、事業を実施していく。

### 事務局

NPO法人  
にじいろクレヨン

- ・連携団体、講師との連絡調整
- ・ワークショップ企画・実施・広報
- ・作品おひろめ・展示会の企画・実施・広報
- ・事例報告作成

### 連携団体

【石巻市】  
《教育委員会・商工観光課・地域協働課等》

【王釜町内会】  
ワークショップ参加

【石巻専修大学】  
商品開発・マーケティング研究

### 専門家

【磐石釜】  
金本明夫氏  
陶芸技術指導

【クラフト・ナカシマ】  
中島範博氏  
デザイン指導

## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** 先進地訪問により、専門家のアドバイスを受け、より実現性の高い手法を検討する事ができた。予定通り毎月のワークショップを開催し、回を重ねる毎に参加希望者が増加し、本プログラムを通してのべ135名の市民がアートに触れる機会となった。本プロジェクトを通し、アートを身近に感じ、石巻に根ざした金華焼きプロジェクトを多くの方に共感していただくことが出来た。また、本プロジェクトを通し、多くの市民がアートに触れる機会を求めている事が分かった。

**今後の展望:** 金華焼きのブランド化、陶芸教室の開設を目指す。地産地消のアートプロジェクトとしての認知度、参加者の増加の為に、広報活動を今後も行う。アート環境の普及と、地元の石巻専修大学と共同で、商品開発、販路拡大について検討し、積極的に実行していく。

# 外部者の受入土壌と新たな生業造りの為の民泊修学旅行誘致事業

(岩手県陸前高田市) ～陸前高田市広田町生活体験推進協議会～

## 対象とする地域課題

外部者の受入方が分からないことによる人口減少／仕事の種類と稼ぎの減少

## 今年度の取組

**目的と概要** 岩手県陸前高田市広田町において、主に関東圏の中高生の民泊修学旅行の誘致を行う。それにより、外部者を受け入れていく土壌づくりと地域の新たな生業づくりを行う。ここでいう「民泊」とは住民の家に実際に宿泊し、生活を共にすることで「ありのままの田舎暮らしを体験する」ことである。修学旅行で訪れる中高生は住民とのふれあいや田舎暮らしを通して、心の豊かさや生きる力を育む。また地域住民は中高生との交流を通して、外部者を受け入れる心が育まれ、また新たな生業となり、生きがい生まれていく。

## 内容

### (1)民泊修学旅行受入の実施

- ◆他団体と連携し、6月～10月に5校、約662名の受け入れを行う。
- ◆受け入れ協力家庭延べ160軒を目指す。
- ◆受入の1週間前には協力家庭全員を対象にした安全講習会を開催する。

### (2)新規受け入れ協力家庭の獲得

- ①6月に成果を報告するチラシを町内の回覧板を利用して配布する。
- ②9月、10月に説明会を計4回実施する。
  - ◆広田町の8地区のうち、3地区では既に実施済みであり、残り5地区内において説明会を開催し、協力家庭の獲得を目指す。



民泊受け入れの様子

### (3)先進地での民泊体験をベースにした研修の開催

- ◆11月～2月の間で、受け入れ協力家庭を対象に、先進地(岩手県遠野市)にて行われている民泊を実際に体験する機会を提供する。受け入れ協力家庭合計26名の参加を目指す。

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【民泊修学旅行受入の実施】

6月～10月に5校、約680名の受け入れを行い、受け入れ協力家庭延べ170軒を目指し活動を進めた。

662名の受け入れ、受け入れ協力家庭160軒であった。

6月 1校 28軒 90名受け入れ実施済み

9月 1校 40軒 132名受け入れ実施済み

10月 3校 133軒 440名受け入れ実施済み

初年度にして、岩手県で最大規模の学校の受け入れ体制を整備することができ、また2018年度については10校の民泊修学旅行が決定している状態を創れた。具体的にいつ、何名がくるのかが明確になることで、受け入れ家庭を増やすことが可能となった。



### 取組2 【新規受け入れ協力家庭の獲得】

6月に成果を報告するチラシを回覧した。また、9月には説明会を4回、10月に4回開催した(20%がそのまま受け入れ家庭となった)。また市の公式広報紙「広報りくぜんたかだ」に4ページに渡っての特集を組んでいただいた。市民が「民泊」について日常会話で話すようになったという話を聞いた。

### 取組3 【先進地での民泊体験をベースにした研修の開催】

11月、12月、1月、2月で実施を予定しており、最終調整中である。受け入れ協力団体と調整は完了しており、現在民泊家庭への出欠確認を実施している。

実際は、11月が2名、12月が4名、1月が11名、2月が9名の計26名が研修に参加した。

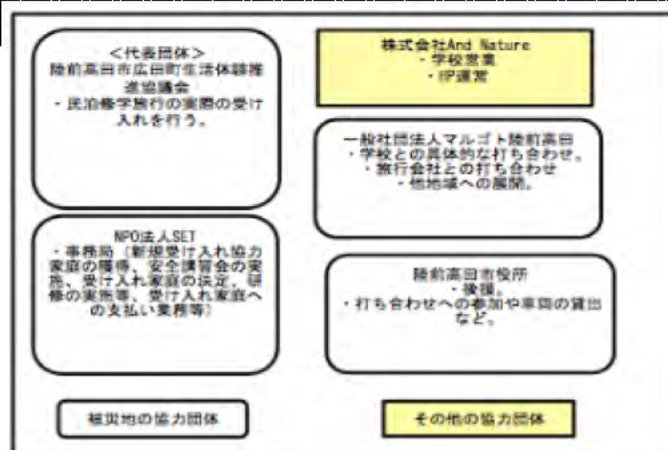
受け入れ家庭の感想としては、

「ありのままでいいのだと自信が持てた。」

「意見交換できて、不安が解消された。」

などの声があり、参加人数は少なかったが、受け入れ家庭にとっては非常に有意義であるのだと感じた。

## 実施体制図



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** 受け入れ協力家庭については概ね予定通り集めることができた。また学校受け入れも順調に行えた。また研修参加受け入れ家庭へのアンケートでは、不安が解消され、「ありのままでいいんだ」という気づきを提供できたことがわかった。

**今後の展望:** 今年度は初年度ということもあり新規開拓に力をいれてきたが、来年度は受け入れ家庭の稼働率を向上させていく取り組みが重要性を増す。何度も受け入れていただくための施策を重点的に実地していきたい。

# 被災中山間地の再生のためのハイブリッド周年養蚕の普及

(宮城県南三陸町、丸森町) ～有限責任事業組合地域創生ビジョン研究所～

## 対象とする地域課題

東北の被災中山間地における持続する雇用の創出と地域再生

## 今年度の取組

**目的と概要** 平成27年度までに、被災中山間地の地域資源(桑園と養蚕技術者)を活用して、付加価値が高く、すそ野の広い新・養蚕技術「ハイブリッド周年養蚕」と、新たな食味を有する健康増進食品「桑プリン」を創出することができた。本事業では、このうち「ハイブリッド周年養蚕」の仙北地域(南三陸町、他)での定着と、仙南地域(丸森町、他)への波及のため、自治体と連携して、養蚕関係者を対象とした展示・セミナー・ワークショップを開催する。これによって、被災地における雇用創出と地域再生を一段と加速させることを目指す。

## 内容

### (1)自治体職員、蚕・絹糸業従事者(養蚕農家、糸繰師、染織師)を対象にしたセミナー・ワークショップ・展示説明会を開催

◆新・養蚕技術「ハイブリッド周年養蚕」の仙北地域(南三陸町、他)での定着と、仙南地域(丸森町、他)への波及のため、自治体と連携して、養蚕関係者を対象とした研修会(展示・セミナー・ワークショップ)を開催した。

第1回:(開催地)丸森町 「ハイブリッド周年養蚕技術の背景と技術構成」、「塩溶液法による繭の処理法」

第2回:(開催地)南三陸町 「ハイブリッド周年養蚕技術の背景と技術構成」、  
「塩溶液法による繭の処理法」

第3回:(開催地)丸森町 「塩溶液法処理繭の繰糸法」、「成果物の展示」

第4回:(開催地)丸森町 「繰糸ワークショップ」、「第1回～3回セミナー・ワークショップ参加者による相互交流と課題抽出」



開催の様子

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【自治体職員、蚕・絹糸業従事者(養蚕農家、糸繰師、染織師)を対象にしたセミナー・ワークショップ・展示説明会を開催】

第1回研修会(H28年6月29日)(開催地丸森町)「ハイブリッド周年養蚕技術の背景と技術構成」、「塩溶液法による繭の処理法」丸森町の養蚕農家佐藤靖氏の養蚕所で、塩溶液法の実技研修会(ワークショップ)を実施した。約150粒の春嶺・鐘月を2ビン漬け込んだ。作業は標準手順書に従って実施した。参加者には、山元町の養蚕家のほか丸森中学の教頭も加わり課外授業の参考にしたとのことであった。丸森町役場農林課課長補佐と農政班班長に対して事前説明をおこなった。(参加者数11名)

第2回研修会(H28年8月25日)(開催地南三陸町)「ハイブリッド周年養蚕技術の背景と技術構成」、「塩溶液法による繭の処理法」南三陸町入谷シルク館で実技研修として、塩溶液法の標準手順書(SOP)による新繭漬け込み、及び半自動繰糸機による繰糸操作の実技指導を行った。また、これまでの成果物(小石丸(亘理)シルク、絹布、高級カラーフォーマル作品、創味くわプリン)の展示を行った。南三陸町産業振興課、南三陸町水田協、工房帛楽、養蚕農家等16名が参加した。(参加者数16名)



第1回丸森町研修会: 養蚕所で養蚕農家に繭の漬け込み法を実地指導しているところ。



第2回南三陸町: シルク館で養蚕農家に繭の漬け込み法を実地指導しているところ。SOPも開示した。

第3回研修会(H28年11月24日)(開催地丸森町)「塩溶液法処理繭の繰糸法」、「成果物の展示」第1回、第2回研修会で漬け込んだ繭の繰糸作業に向けて、データ取りと作業準備を行った。12粒で繰糸。1日(10:00~17:00)で繰糸できた量: 繭 約100粒、糸 約8,500メートル、30グラム(およそ31デニール)。 (参加者数8名)

第4回研修会(H29年1月11日~25日)(開催地丸森町)「繰糸ワークショップ」、「第1回~3回セミナー・ワークショップ参加者による相互交流と課題抽出」糸は、実働7日で9粒繰糸がポビン2個(2016年夏蚕)。12粒繰糸がポビン3個(2016年春蚕)、30粒繰糸が2個(2014年晩晩秋蚕)取れた。「課題抽出」今後はいかに生産量をあげていくか=>地元の経験者をシルバー人材センターで募集。索緒をいかにスムーズにできるか=>繭を30℃程度のぬるま湯につけると索緒しやすい。(参加者数延べ8名)



第3回丸森町研修会: 従来蚕種を用いた半自動繰糸機改1の実技指導。



第4回丸森町研修会: 9粒繰糸、ポビン2個。12粒繰糸、ポビン3個。30粒繰糸、ポビン2個。生産量をいかにあげていくかが課題。

### 実施体制図

南三陸町及び丸森町の養蚕農家は、通常蚕種、希少繭・小石丸(亘理)を工業レベルで生産できた。(株)東北撚糸は糸繰りおよび染織を担当。(一財)宮城県蚕糸会は、蚕糸絹業者の集団で、企画評価と情報提供を行った。(株)しるく総合開発は、資金繰りが悪化し十分支援効果がえられなかった。

<代表団体>  
有限責任事業組合  
地域創生ビジョン研究所  
・事務局(自治体との調整や企画の実施管理)  
・技術指導

<構成団体②>  
(株)東北撚糸  
・繭の繰糸、染織、流通

<協力構成団体①>  
南三陸町養蚕農家  
丸森町養蚕農家  
・桑葉、養蚕、繭の生産

<構成団体③>  
(一般財団)宮城県蚕糸会  
・企画、立案、事業広報

### 事業の成果・今後の展望

事業の成果: 研修会(セミナー・ワークショップ、展示説明会)は当初のスケジュール通り完了した。実施場所に関しては、十分な技術普及のため丸森町を3回とした。本事業によって、南三陸町と丸森町に周年養蚕を実施する養蚕グループが組織され、被災中山間地においてハイブリッド周年養蚕技術の移転が進展した。今後の展望: 半自動繰糸機の改良や糸車をポビン型とし、糸の膠着状態を確認する必要がある。養蚕農家自身で冬季糸取りができることが確認できたので、今後は周年ハイブリッド養蚕法の普及活動を継続し、参加農家数を増やして生糸を増産する。本事業で製した絹糸は、今までにない伸縮特性を有しているため、市場競争力につき、蚕糸絹業と流通の専門家の評価を積み上げる予定。(参考)次回研修会(H29年3月4~11日)(開催地)南三陸町 ひころの里シルク館・シルクフラワーフェスタに出展。大震災6年目を追悼して、繰糸実演、成果物とネットショップ「しるくブテック小石丸」の展示説明を実施予定。

# 東北被災地語り部フォーラム2017

(宮城県南三陸町他) ～東北被災地語り部フォーラム2017 実行委員会～

## 対象とする地域課題

自然災害の記憶の風化の防止と、教訓の継承。語り部の活動継続や高齢化等の課題と向き合う為の次世代の育成、広域の交流・情報交換等。インバウンド含め交流人口を拡大するためのプラットフォーム創生。

## 今年度の取組

**目的と概要** 東日本大震災より6年目を迎えようとしている今、震災の記憶の風化を防ぐ為に各地で行われている『語り部』活動を永く継続するには、語り部の雇用と次世代の人材育成が不可欠である。「東北被災地語り部フォーラム2017実行委員会」(以下、当委員会)では、ゆるやかな『語り部ネットワーク』を独自に構築し交流と情報の交換・共有・発信を広く進めていく為に、まずは東北地方の被災地の連携を高め、ネットワークを繋げることに、その後は更なる広域連携ネットワークの構築を目指す。

## 内容

### (1)各被災地を訪問し、語り部活動実施主体関係者と交流しての事例収集や関係構築

- ◆ 過去の自然災害被災地を訪問、交流することによって、各地域との顔が見える情報交換・共有・発信を行う予定である。それによって語り部活動の広がりや各個人の研鑽をする中で、未来へ継続した人材育成や防災・減災教育に繋げていくことも視野に連携もしていきながら、将来的には関西や九州にもネットワークを広げることも目的である。

### (2)東北被災地語り部フォーラム2017の開催

- ◆ 事例の紹介や具体的なノウハウの紹介の為に、各地域の語り部関係者及び一般参加者を対象にし、フォーラムを実施。2016年11月に東日本大震災をテーマとした三陸地域の語り部座談会を開催し、いろいろな課題や思いを共有することが出来、さらに課題解決やそれぞれの希望、思いを東日本地域の連携や広がり活かせるような取り組みの提案を目的とする。又、2017年2月に開催される第二回全国被災地語り部シンポジウムin西日本の開催にも東北地域の情報発信も含め、誰もが語り部として未来へ伝承していくキッカケの場を作る。



フォーラムの様子

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【各被災地を訪問し、語り部活動実施主体関係者と交流しての事例収集や関係構築】

#### ■宮城県石巻市大川地区

大川伝承の会の方々と関係構築を図り、語り部活動の目的の確認やそれを継続していくための活動主旨を学び、意見交換を行った。未来へ何を語り継ぐかを再確認すると同時に、今まで自分たちが取り組んできた方向性も間違っていないことを確信する有意義な時間にもなった。

#### ■新潟県中越地方

情報発信の方法や産学官民一体の取り組み、被災地同士のネットワークの構築のキッカケになるヒントを得られた貴重な機会となった。時間の経過＝風化と向きあう中で、教訓の伝承だけでなく目の前の課題でもある3つの総合性(①震災復興②災害体験の市民化、社会化③地域活性化)の発揮の為、単体ではなく連携して取り組んでいることを、東北でも活かすために連携をしていくことを確認した。

#### ■北海道奥尻地区

語り部活動が形成されなかった理由についても知ることが出来たのは驚きと同時に改めて課題を問う事が出来、有意義なものとなった。

#### ■岩手県沿岸地域

「津波てんでんこ」。改めて岩手沿岸地域の方々が昔から何を伝承したかったのか、その理由の一端をそれぞれの場所で知り、伝える方法についても様々なカタチで工夫や努力をされている姿勢は私たち自身にも跳ね返ってくることを切に感じた。語り部の方々一人一人がその地域毎に伝えていくものは、その地域に住む人だからこそその責任感や使命感は共通するものであり、また共有すべきものであり、人だからこそその限界、人だからこそその希望、夢、それを感じた機会となりお互いの関係構築が図られた。

#### ■三陸被災地語り部座談会の開催

語り部の各地域からの経験・考えを一度に聞ける場となり、話を聞いて知るだけでなく、地域差を比較しても新たな問題点や課題を知ることでもできた。

「誰もが語り部」というスタンスから全員参加型で「悩み・課題」「願い・希望」、「気になること」、など自由に意見を出し合い、それぞれのキーワードをこれからも継続して話し合っていくキッカケにもなり、それが今までの繋がりを深めたり、新たなネットワーク作りの第一歩にもなった。



座談会の様子

### 取組2 【東北被災地語り部フォーラム2017の開催】

2016年11月に開催した語り部座談会で出されたキーワードを基に、教訓を未来へ語り継ぐことはもとより、どう具体的に世代を超えて1000年先の未来へ届けたいのか踏み込んで議論を交わす場となった。その中で、語り部という活動を世代を超えて繋げる「タテの繋がり」、そして被災地ではない「未災地」の被災経験のない人たちにもどう伝えていくのか「ヨコの繋がり」という課題も提言。

そのための人智を一人ではなくまたこれからさらにみんなで考えていくことを確認し合えた今回のフォーラムはこの場で終わりではなく、この先も各地域、各一人一人の命を守ることも含め連携して前に進んで行くこと場になった。来年度以降もこのような機会をどんどん作り地域が自立復興していく形を確立いく予定であり、さらに日本だけでなく「語り部」は「KATARIBE」として世界共通語にすることも目指し、この活動により東北のインバウンド集客・交流の起爆剤になることも期待される。



フォーラムの様子

### 実施体制図

「南三陸ホテル観洋」を代表とし、ハード・ソフト面を「南三陸ホテル観洋」が、ソフト面を「南三陸町地域観光復興協議会」と「南三陸ガイドサークル汐風」「南三陸復興みなさん会」の協力・連携で担う。

#### <代表団体>

株式会社阿部長商店 南三陸ホテル観洋  
・事務局(自治体との調整や企画の実施管理)・企画立案、実施・語り部活動の実施

南三陸町地域観光復興協議会  
南三陸復興みなさん会  
・企画立案、実施

南三陸ガイドサークル  
汐風  
・語り部活動の実施

### 事業の成果・今後の展望

事業の成果と今後の展望:2016年度に予定した視察や連携作りの足掛かりは事業開始前よりも必要性があることを実感。宮城県内各地、岩手県沿岸各地、福島県沿岸地域含め東日本大震災被災地の視察活動を今後も足掛かりにしながら、それぞれの地域の現場で見て、聞いて学ぶことを土台にし、語り部活動の課題や実践例の共有を図り、ゆるやかなネットワークでありながらも同じ目的を持つ仲間としての関係構築を進めていく予定である。同時に日本人・外国人問わず誰もが自然災害だけでなく、命を守ることを大切に出来る世界を目指していきながら、交流の機会を作り、1000年に1回の災害と言われる被災をしたこの東北の地だからこそ、1000年に1回の学びの機会と捉え、そこから得られた伝承を発信、提案していく予定である。

# 区画整理後の地域協働型復興まちづくりと自立コミュニティの再生

(宮城県石巻市) ～湊北地区合同まちづくり協議会～

## 対象とする地域課題

地域の公共財等の地区環境向上／住宅再建支援／未利用宅地の有効活用等による復興街づくり／地域コミュニティの再生

## 今年度の取組

**目的と概要** 石巻市湊地区は旧北上川河口近くに位置し市街地を形成していた。大震災により多くの生命と生活基盤を喪失したが、同地区は可住区であり、現在行政を中心に土地区画整理事業により復興に取り組んでいる。しかし土地区画整理事業では、当該地域の道路等の形状や換地により所有者は決まるが、街づくりの方向性や内容を議論する機会はない。そこで当協議会では、まちづくり専門家の協力を受け、地権者等に呼び掛け7回のワークショップを行ない、『街づくり提案書』をまとめた。本事業では、提案書を土台とし、住民が参画するまちづくりの実現を目指す。

## 内容

### (1)行政との調整会議の実施

- ◆専門家を招聘しての地区環境整備の具体的内容についての調整を行う。
- ◆住民の意識向上を図っていくことで、少子高齢社会に出来得る限り対応する住民の協働の力によるコミュニティづくりを行うため、住民間や行政との調整を推進する。

### (2)住民間意見調整会議の実施

- ◆街づくり提案書の実現に向けて、公共施設や河川堤防の整備及び住宅再建、未利用宅地の有効活用について住民間の調整会議を実施する。
- ◆専門家を招聘しアドバイスを受ける。
- ◆アンケート調査結果の検討などの意見交換も行う。

### (3)先進地区との交流会の開催

- ◆公共施設整備及び宅地の有効活用の先進事例(岩沼玉浦西地区)を訪問し、実施主体関係者と交流する。

### (4)アンケート調査の実施

- ◆住宅自力再建の動向、未利用地の活用意思の把握、今後の復興街づくりの具体化に向けた材料にするため、アンケートの実施する。



まちづくりワークショップ  
(平成27年度)



区画整理地区(15ha)の完成パースと計画図

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【行政との調整会議の実施:4回】

- ①専門家を招き、合同協議会役員と市の担当3課とで、昨年度のまちづくり提案書の整備内容についての合同検討(8月22日)。それを受けて、市区画整理課が道路、公園、緑地整備の原案を作成
- ②北上川の河川堤防整備について、専門家を招き、国の河川事務所が検討している整備案についての意見交換による調整会議(住民ワークショップ形式:8月27日)
- ③住民全員に参加を呼びかけ、専門家を招き協議会で原案の説明と意見交換による調整会議(10月22日)
- ④市の原案についての住民の変更要望案について調整会議(12月21日)



### 取組3 【先進地区との交流会の開催】

11月13日;参加者15名、石巻市市内の先行的に整備が進められている蛇田地区の公共施設の整備内容を視察するとともに、防災集団移転事業ですでに事業が終了している岩沼市玉浦西地区の地区環境整備の視察を行った。また玉浦西地区では、地区協議会の果たした役割、行政の役割についてのヒアリングを行った。道路、公園、緑地の整備について合意形成を図る多くの材料を得ることができた。



### 取組2 【住民間意見調整会議の実施:4回】

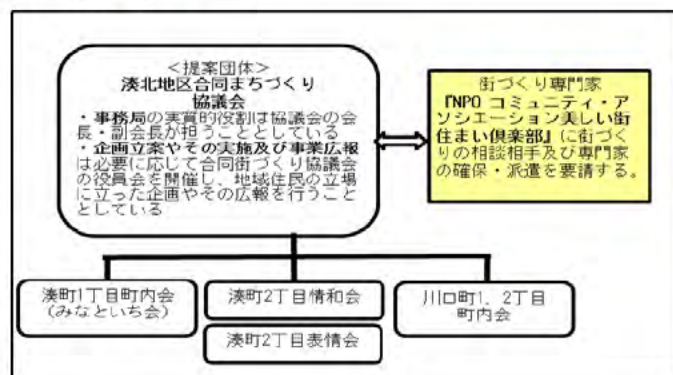
- ①各町内会の役員会で構成される合同委員会で、専門家を招き、市の原案についての調整会議(10月1日)
- ②視察を受け、市の原案に対する住民側からの変更要望案の取り纏め調整会議(12月3日)
- ③変更要望に対する市の回答案についての検討調整会議(1月15日)
- ④再変更要望についての検討調整会議(2月19日)



### 取組4 【アンケート調査の実施】

仮換地の指定先(個人情報扱いで把握できていない)、住宅再建の意向、再建をしない場合の土地活用意向について、アンケート調査を行った。(1月上旬配布、1月下旬回収、アンケート配布数:185、回収数54)回収率が低かったが、住宅再建意向者は25%程度と少なく、事業再開希望者はわずか3名、30%が売却や貸地を考え、30%がまだ検討中であり、10%が子や孫に残すとしている。

## 実施体制図



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** ほぼスケジュール通りに進めることができた。長時間を要する被災市街地の区画整理事業により帰還者が減少し、そのため協議会の会議への参加も毎回15人~25人と減少しているが、今年度行った先進地視察や先進地との交流の経験により、安全、安心、使い易い道路や公園の整備内容について、理解が進み、住民間の合意がかなり図られたものと考えられる。また、地権者へのアンケートについては市の協力により、全地権者への送付を行うことができたものの高い回答率ではなかったことが残念であった。

**今後の課題:** 昨年度のまちづくり提案書の提案を受けた市の対応案、この対応案に対する市民の再提案と進んでいるが、未だ両者には相違があり最終調整が必要となる。

アンケートによれば、住宅再建者が30%程度と少なく、時の経過に伴うさらなる低下が懸念される。コミュニティの再建に向け、未利用となる宅地をどのように有効に活用してまちづくりを進めるかが課題となっている。

# 自治活動と生きがい仕事による復興促進事業

(宮城県石巻市他) ～特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター～

## 対象とする地域課題

仮設住宅から災害公営住宅への移行期を迎えた被災地での、新旧住民によるコミュニティ・生きがいづくり

## 今年度の取組

**目的と概要** 被災地での復興に向けて、住民が支え合い、生きがいをもって主体的に暮らせる地域にすることを目的に、住民主体の自治活動や生きがいづくりを主眼に置いた仕事づくりを発掘・提案するとともに、被災地域の実践者による発表交流会(コンテスト)の開催および事例集の作成をとおして広く発信した。

## 内容

### (1) 実行委員会の開催

- ◆継続的に住民主体の活動の発掘・提案を働きかけるため、発表交流会の運営について検討し、実際の運営および実施後の反省を行う。委員の一部は審査委員も兼ねる。

委員長: 仙台白百合女子大学 教授 大坂純さん(審査委員を兼務)

委員: 特定非営利活動法人つどい 事務局長 元持幸子さん(岩手県大槌町)、宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸さん(宮城県社会福祉士会)、一般社団法人 パーソナルサポートセンター 理事 立岡学さん(宮城県仙台市)、特定非営利活動法人 Jin 理事長 川村博さん(福島県浪江町)、特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田昌弘(宮城県仙台市)

開催日: ①2016年7月28日、②2017年1月13日、③2017年2月26日に宮城県仙台市で開催。

### (2) 発表交流会の開催

- ◆発表交流会(コンテスト)を通じて社会的関心を喚起し、被災地の実践は平常時の地域活動にも活かせることを広く伝える。
  - ◆岩手県、宮城県、福島県を中心に、震災経験のある全国各地から実践を公募(16年9～12月、応募数25件)。
- 実行委員による選考(17年1月13日)のうえ、応募者や参加者が交流する「発表交流会」を開催(17年2月26日)し、審査委員の審査により評価の高かった実践を表彰する。また、表彰団体には副賞を別途用意する(本事業外・企業協賛を募った)。

### (3) 実践状況調査の実施

- ◆自治活動及び生きがい仕事を発掘するために調査し、事例集にまとめる。

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【実行委員会の開催】

継続的に住民主体の活動の発掘・提案を働きかけるため、発表交流会の運営について検討する。

- ◆委員長: 仙台白百合女子大学 大坂純教授
- ◆委員: 被災3県の支援団体職員4人、事務局3人
- ◆開催日・内容

第1回 2016年7月28日(木)

委員長の選出、事業概要、今後の日程、協賛金募集  
→協議内容を踏まえ、要綱を作成し、9月～12月に公募。

作成した要綱(右図)

<http://www.clc-japan.com/events/detail/6289>

第2回 2017年1月13日(金)

応募状況の確認、予選選考、当日の運営  
→予選通過11団体を選出。事例集作成開始。  
一般観覧者の募集開始。

第3回 2017年2月26日(日)

発表交流会の運営。開催終了後に反省会。



### 取組2 【発表交流会の開催】

発表交流会(コンテスト)を通じて社会的関心—を喚起し、被災地の実践活動は平常時の地域活動にも活かせることを広く伝えた。

- ◆全国から実践を公募(16年9月～12月2日)し、被災3県を中心に1都6県より25件の応募があった。
- ◆予選選考会にて選出された11件が、2017年2月26日(日)せんだいメディアテークでの発表交流会に出場。宮城県岩沼市の「ちびぞうくらぶ」が大賞に選ばれた。来場者はおよそ250人。  
発表交流会写真→



### 取組3 【実践状況調査の実施】

応募いただいた団体の活動について調べ、事例集(右図、A4・12頁冊子)にまとめて1,000部作成。発表交流会にて配布したほか、すべての応募団体や後援団体等にも配布。ホームページにも3月中に掲載。



## 実施体制図

3県の被災地で活動する支援団体などと実行委員会を構成し、作業を協働して行った。

広報・発表交流会の実施

特定非営利活動法人つどい  
一般社団法人パーソナルサポート  
センター  
宮城県サポートセンター支援事務  
所  
特定非営利活動法人Jin

ヒアリング(事例集作成)

特定非営利活動法人つどい  
特定非営利活動法人Jin

<全国コミュニティライフサポートセンター>

・事務局(応募者との調整や企画の進行管理、  
事例集作成)

## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** 広報力が弱く応募件数は少なかったものの、結果的に魅力的な活動が集まり、歌やダンス・劇など多彩な表現と工夫で自分たちの活動を魅力的に伝え合うことができ、新聞記事にもなった。また観覧者のみならず、11団体が相互に認め合い称え合うことで、自分たちの活動に誇りをもつとともに、東北と熊本地震の活動交流につながり、今後も他団体との交流や活動の広がりが期待できる場となった。東日本大震災支援に関わる審査委員や実行委員が協力し、つながりが強くなった。  
**今後の展望:** 賞金や運営資金のための協賛金を別途募ってきたが、来年度はより自立運営をめざして、これまで協賛いただいた団体を中心に趣旨をご理解ご支援いただけるよう強化していきたい。

# 東北産花き輸出振興プロジェクト

(福島県川俣町他) ～東北花き園芸復興協議会～

## 対象とする地域課題

東北産花き(切花・鉢花)は輸出に関する実績の不足／解決に向けた取組の実現

## 今年度の取組

**目的と概要** 国内花き産業にとって東北の花き生産地は地理的な優位性を活かし夏場の生産地として重要な役割を担っているが、花き生産量の増加や新規販路の開拓が東北の花き生産者の今後の課題である。このため、東北産花きの新たな販路拡大及びブランドの確立、産地の人材育成や持続的な発展を目的として、市場や生産者団体等と連携し、トルコ・アンタルヤ国際園芸博覧会にて東北産花きの展示やワークショップ、商談等を行うことをきっかけとし海外への販路拡大に向けた体制の確立を図る。

## 内容

※本事業は、トルコ・アンタルヤ国際園芸博覧会での東北花きの展示や商談等を主な取組としたものであったが、2016年6月末のイスタンブール・アタテュルク空港でのテロ事件や7月16日のトルコ軍部による蜂起を受け、取組内容の変更を余儀なくされた。

### 【当初計画】

#### (1)トルコ・アンタルヤ国際園芸博覧会への出展(2016年7月27日～8月9日)

- ◆福島県・宮城県・岩手県の花き(切花)の展示と世界各国から訪れる花き業界関係者向けワークショップを実施し、東北産花きの素晴らしさをアピールするとともに輸出振興のきっかけとする。

#### (2)東北産花き輸出計画策定に向けた検討会の実施

- ◆アンタルヤ国際園芸博覧会終了後、東北の花き生産者の方々にもお集まり頂き、実際に自分達が生産している花きを輸出するために必要な対策等を検討する会を開催する。

### 【変更後】

#### (1)トルコ・アンタルヤ国際園芸博覧会への出展(2016年7月27日～8月9日)

- ◆ワークショップの開催を中止し、花き生産者の紹介パネルや映像展示と現地スタッフによる東北花きの展示を実施した。出展に向けて作成したパネルデータや映像は、(2)のwebによる情報発信を行う際の素材とすることができた。

#### (2)Webによる情報発信

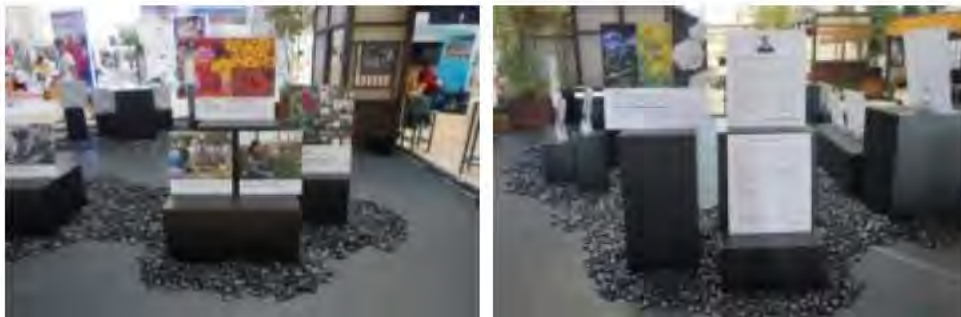
- ◆出展に向けて作成した東北の花きや生産者の紹介パネル及び映像データのウェブサイト上でのPRを9月上旬に実施した。ウェブサイトについては安代りんどうの生産者に早速海外向けのPR資料として使用頂いた。

※博覧会における商談等が実施できないことを受け、当初予定していた検討会を開催する意義が希薄になることから中止とした。

## 個別の取組の詳細

### 取組1 【トルコ・アンタルヤ国際園芸博覧会への出展】

当初予定していたワークショップや生産者が直接生産した花をPRするなどの出展企画を変更し、花き生産者の紹介パネルの展示のみ実施した。



アンタルヤ国際園芸博覧会 パネル展示の様子

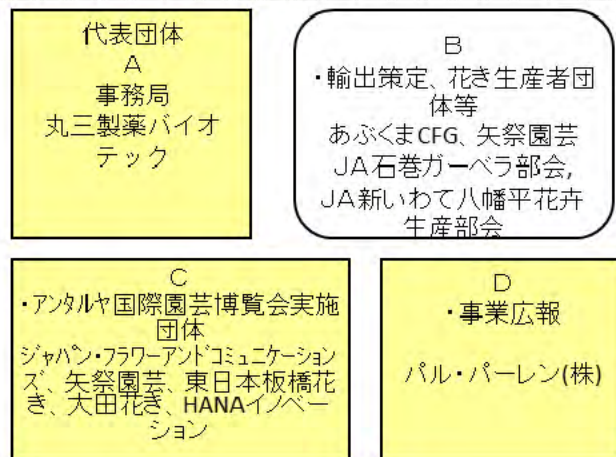
### 取組2 【Webによる情報発信】

出展に向けて作成した東北の花きや生産者の紹介パネル(全19点)や映像データ(1点)については今後も国内外へPRしていくことも想定し、ウェブサイト上でPRを行った。



パネル、映像データをウェブサイト上で掲載

## 実施体制図



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** 出展内容は変更になったが、生産者の紹介をする為のパネルデータや生産者や産地のPR動画をウェブサイト上で公開した。当事業の中で形に残るものとして今後活動していくためのツールが完成したことは、大きな成果である。

**今後の展望:** 今後は輸出のノウハウを持つ全国花き輸出拡大協議会など他団体との提携やウェブサイトの内容の更なる拡充を図りながら、今回作成したツールを活かして、来年度以降も福島県、宮城県、岩手県の被災地3県の花きについては海外への輸出を含む販路拡大を目的としたPR等を継続して行っていく。

# 廃校を活用した、支倉6次産業化コミュニティ形成プロジェクト

(宮城県川崎町) ～支倉小学校再生コンソーシアム～

## 対象とする地域課題

少子高齢化による人口の減少。地域資源を活用した地域情報の発信。地域産業の活性化と雇用の創出。

## 今年度の取組

**目的と概要** 地域と都市との共生により、地域資源(農林水産物、人、技、文化等)を活用した新たな地域複合ビジネスの創出を行うことで、地域の自慢と誇りの醸成をしながら、持続可能な地域経営モデルの構築を行います。具体的には、宮城県川崎町の廃校となった「支倉小学校」を、6次産業化コミュニティ施設としてリノベーションし、「地域の人々が主役となる場づくり」と「都市農村交流による新たなコミュニティ創出」によって、持続的に地域で育める地域循環型ビジネスの形成を目指します。

## 内容

### (1)住民合意形成を目的とした勉強会及びワークショップの開催

#### ①勉強会及びワークショップ開催。

- ◆ 多くの住民に参加してもらうために企画立案、案内チラシの作成、住民への声かけを実施する。
- ◆ 勉強会は、「廃校施設の利活用」「活用目的の設定、住民参画促進」「目的達成への目標設定」に分け、全3回実施する。
- ◆ 参加者は、各回10名～20名を想定。
- ◆ 全3回の勉強会では同一の講師を招聘し、住民との意思疎通や意見共有の強化を図る。(専門家:1組織×3回)

### (2)先進地を往訪し、運営機関との交流を通じた成功に必要な要素及び事例の収集

#### ①先進地にて必要な要素を得るために先進事例を持つ運営機関との交流を通じて、事業の成功に必要な要素及び事例の収集を行う。

- ◆ 参加者は、事業主体の職員等に加えて、行政関係者及び住民等、約5名～を想定。  
(1箇所×5人×2日、1箇所×25人×1日)
- ◆ 収集した事例の分析を行う。また、勉強会での資料としても活用する。

### (3)施設運営に係る関係者及び専門家を招聘し、事業構築に向けた客観的助言を求める

#### ①施設運営に係る事業構築に向け、専門家を招聘し、地域の実情の共有を図りながら、勉強会及び先進地の事例分析等によって表れた課題解決策と、今後の事業運営に向けた戦略づくり等を、意見交換を交えながら実施する。

- ◆ 上記の勉強会及びワークショップ、先進地の事例分析によって表れた課題等について、専門家を招聘し現地視察を行う。事業主体の職員との意見交換会を実施し、実施計画のブラッシュアップを図る。  
また後日、勉強会にて住民に対してもフィードバックを行う。(専門家1人×1回)

## 個別の取組の詳細

### 取組1

【住民合意形成を目的とした勉強会及びワークショップの開催】

**勉強会①「第1回旧支倉小学校の未来を考えるつどい」(参加者18名)**

参加者へ、視察を行った先進事例の報告と、事業内容の説明を行った。その後、地域コミュニティ形成の役割を担う廃校のあるべき姿や、望まない姿について議論を行った。

**勉強会②「廃校活用への見解共有と協議会設置意義」(参加者11名)**

視察を通して得た、地域住民の廃校活用への見解を導き出すためワークショップを行った。視察先感想、勉強会③の主題、住民主体の協議会設置の必要性について議論した。

**勉強会③「第2回旧支倉小学校の未来を考えるつどい」(参加者12名)廃校活用の目的の明確化と共有を座談会形式で行い、その後目的達成に必要な具体的な目標について意見交換を行った。**



勉強会①ワークショップの様子



勉強会③座談会の様子

### 取組2

【先進地を往訪し、運営機関との交流を通じた成功に必要な要素及び事例の収集】

**1) 視察①「のじまスコラ／ミエレ(兵庫県淡路市)」**

平成28年10月7日～8日(泊2日)にて、兵庫県淡路市野島(淡路島内)にある廃校活用施設、「のじまスコラ」を訪問。運営者の(株)パソナグループの瀬川氏より、施設開設までの話や地域との連携、運営の課題等について意見交換を行った。



のじまスコラ視察の様子

**2) 視察②「新産業創造館クラッセ、山形まなび館(山形県)」**

平成29年1月28日に、山形県庄内町の6次産業化推進施設「新産業創造館クラッセ」と山形市内の旧校舎活用施設「山形まなび館」を住民20名と一緒に訪問した。地域資源の活用手法や地域コミュニティの賑わい創出、利用者拡大の創意工夫等について意見交換を行った。



クラッセ視察の様子

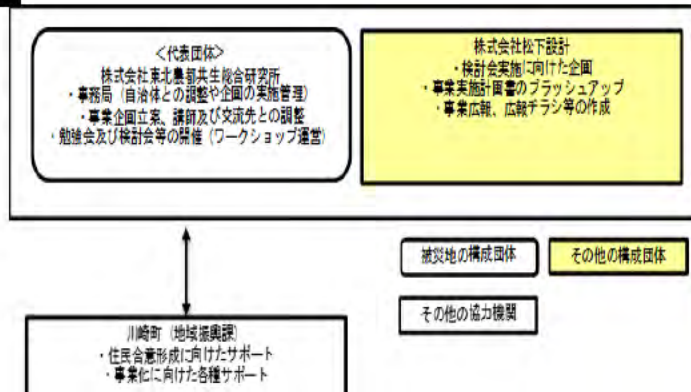
### 取組3

【施設運営に係る関係者及び専門家を招聘し、現地視察を通して事業構築に向けた客観的助言を求める】

平成28年12月16日～17日(泊2日)にて、地域活性化及び情報発信等が専門である渡辺広之氏を招聘し、地域の産業状況や商業施設等の視察と共に関係者等との意見交換を実施。また、今後の地域発展の可能性や、事業推進で直面する課題解決策、今後の事業戦略構築について客観的助言を頂いた。

## 実施体制図

株式会社東北農都共生総合研究所と株式会社松下設計とで協力し合い、右図の役割分担で事業を推進。



## 事業の成果・今後の展望

**事業の成果:** 取組1は、地域住民との合意形成を優先し、企画内容を適宜修正しながら、ワークショップを中心に実施した。当取組を通じて、積極的に廃校活用事業に関わろうとする住民も表れ、前向きな意見が収集できた。取組2について、2回目の事例収集については、住民と一緒に取組を実施。将来の廃校再生に向け、情報収集と共にイメージの共有が図れた。取組3について、専門家の専門知見とマクロ的な視野からのアドバイス等を受けたことで、事業計画に新たな視点を組み込むことができた。これらの取組を通して、支倉地域としての廃校のあり方や活用意義の共有を図れたため、目標に向かった更なる協力を得られるだろう。

**今後の展望:** 地域住民の積極的な事業参画意識の醸成を図る必要がある。特に、女性及び地元若者の参画が課題である。住民と事業目的や将来の地域ビジョンの共有を図りながら、イベント等の企画・開催によって、女性や若者が参画しやすい環境(場)づくりを行っていく必要がある。また、啓蒙の為の情報発信活動等も継続的に行う必要がある。合意形成が図れたことにより、住民同士の事業参画の輪が広がることを期待し、今後も積極的に勉強会や説明会等を行っていく。